

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第48号

平成5年度発掘調査予定の遺跡-----	水谷 壽克-----	1
平成4年度京都府内埋蔵文化財の調査-----	伊野 近富-----	7
長岡京条坊制地割計画の再検討(上)-----	鍋田 勇-----	15
—平成4年度発掘調査略報—-----		23
18. 遠所遺跡群	22. 植物園北遺跡	
19. 桐谷古墳群・ニゴレ遺跡	23. 名神高速道路関係遺跡	
20. 神宮谷古墳群	24. 荒坂遺跡	
21. 八木城跡第2次		
府内遺跡紹介 59. 豊楽院正殿跡-----		38
長岡京跡調査だより・45-----		41
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧-----		44
センターの動向-----		45
受贈図書一覧-----		47

1993年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 平成5年度発掘調査予定の遺跡

水谷 壽 克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国、公社、公団及び府の開発事業等に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施している。年間の受託事業は、京都府教育委員会が開発事業者と文化財保護法による事前協議を行った上で当調査研究センターと調整をはかっている。事務局の体制は、事務局長以下3課7係(総務課1係、調査1課2係、調査2課4係 総職員数48名)の体制をとり、業務の円滑化をはかっている。

平成5年度に予定している受託事業件数は、別表に示したとおり、27件を数える。このうち、発掘調査の受託件数は25件(52遺跡)、残る2件は遺物整理・報告書作成の受託事業である。発掘調査25件を原因別にみると、道路新設・改良に伴う調査が11件、農地ほ場整備関係が2件、庁舎・学校・住宅建設等に伴うものが8件、施設整備・堤防建設・河川改修・団地造成に伴うものがそれぞれ1件である。今年度は、京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)や「丹後あじわいの郷」建設に伴う大型プロジェクトによる大規模開発の本格化、及び道路関係の受託事業が増加傾向にある。

以下、今年度調査予定の遺跡について略述する。

1 左坂古墳群ほかは、丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴う調査である。左坂古墳群は、大宮町周枳集落背後の丘陵上に築かれた総数115基からなる古墳群で、平成2年度から京都府教育委員会・当調査研究センターが27基の調査を実施し、5世紀から6世紀にかけての木棺直葬墳や横穴式石室墳を検出している。今年度は古墳20基及び丘陵斜面に築かれた横穴群(里ヶ谷横穴)の調査を実施する。このほか、古墳群2件(久美浜町葉師古墳・網野町遠所古墳群)、城館跡1件(弥栄町溝谷城跡)、散布地2件(弥栄町黒部遺跡・久美浜町女布遺跡)の調査が予定されている。

2 堀坂神社古墳は、久美浜町の府道拡幅工事に伴う調査で、径約12mの横穴式石室墳の調査を実施する。

3 ニゴレ遺跡ほかは、丹後地域の農業生産の拠点となる「丹後あじわいの郷」建設に伴う調査である。昨年度の試掘調査では、遠所遺跡に隣接する谷部に古代製鉄に関連する遺構が一部検出されており、今年度は部分発掘及び試掘調査を実施する。

付表 平成5年度発掘調査予定遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	種 別	所 在 地	原因工事
1	左坂古墳群ほか	古墳ほか	大宮町ほか	農地造成
2	堀坂神社古墳	古墳	久美浜町	道路建設
3	ニゴレ遺跡ほか	生産遺跡ほか	弥栄町	施設整備
4	奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	道路建設
5	上野古墳群	古墳	丹後町	道路建設
6	嗎岡遺跡ほか	集落跡ほか	加悦町	道路建設
7	定山遺跡	集落跡	野田川町	住宅建設
8	七百石遺跡ほか	集落跡ほか	綾部市ほか	道路建設
9	大島東遺跡	集落跡	綾部市	堤防建設
10	八木城跡ほか	城館跡ほか	八木町ほか	道路建設
11	池尻遺跡	集落跡	亀岡市	道路建設
12	穴川遺跡	集落跡	亀岡市	住宅建設
13	太田遺跡ほか	集落跡ほか	亀岡市ほか	ほ場整備
14	平安京跡(左京一条二坊)	都城跡	京都市上京区	庁舎建設
15	平安京跡(左京一条三坊)	都城跡	京都市上京区	庁舎建設
16	伏見城跡ほか	城館跡ほか	京都市伏見区ほか	校舎建設
17	若林遺跡	集落跡	宇治市	住宅建設
18	内里八丁遺跡ほか	集落跡ほか	八幡市	道路建設
19	北尻遺跡	集落跡	精華町	道路建設
20	棕ノ木遺跡	集落跡	精華町	施設建設
21	瓦谷遺跡ほか	集落跡ほか	木津町	団地造成
22	燈籠寺遺跡	集落跡	木津町	河川改修
23	植物園北遺跡	集落跡	京都市左京区	庁舎建設
24	長岡京跡ほか [名神]	都城跡ほか	京都市南区ほか	道路建設
25	長岡京跡ほか [府道]	都城跡ほか	長岡京市ほか	道路建設
26	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市	
27	天若遺跡	集落跡	日吉町	

4 奈具岡遺跡は、府道網野岩滝線建設に伴う調査である。昨年度国営農地関係で調査した奈具岡遺跡では弥生時代の玉作り集落跡が検出され、その関連遺跡が期待される。

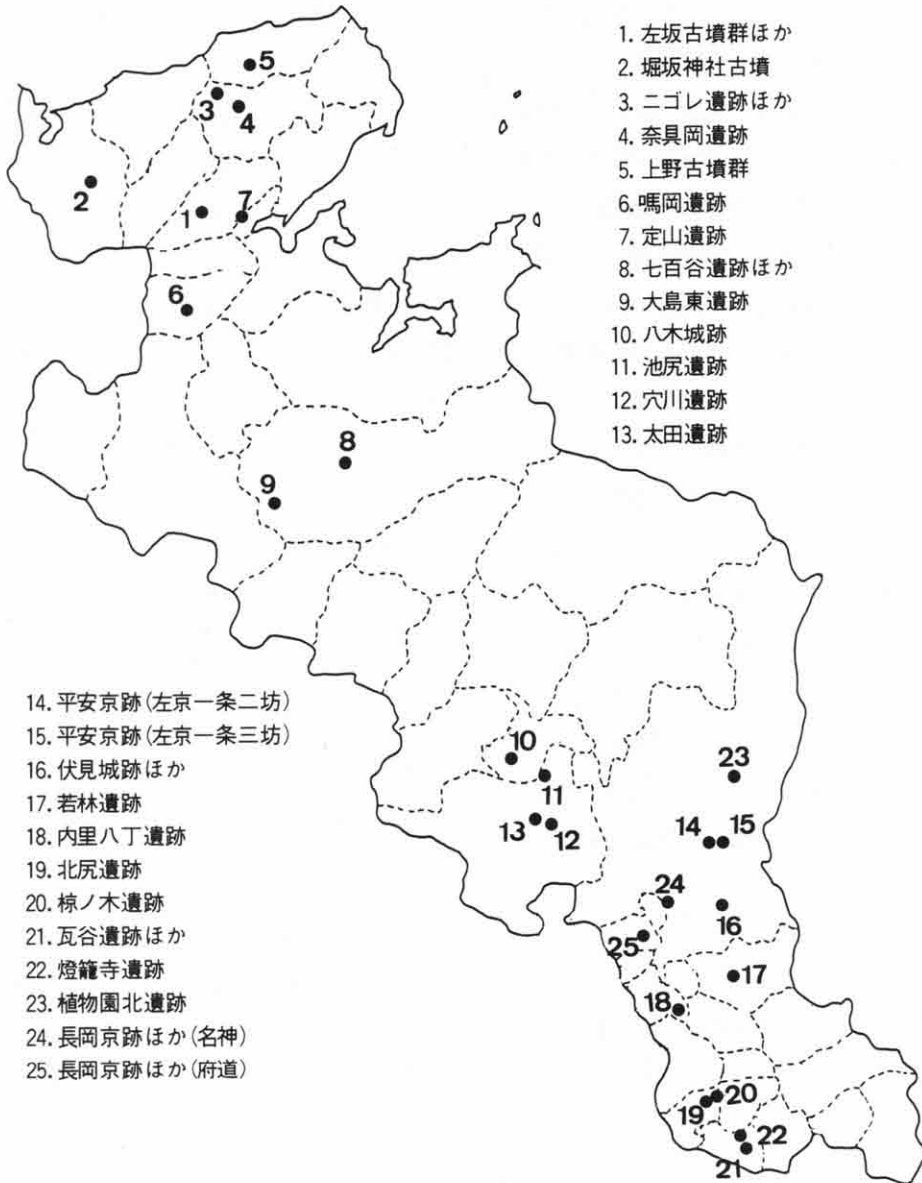
5 上野古墳群は、大山墳墓群の南方丘陵上に位置する10数基からなる古墳群である。丹後広域農道建設に伴い、石室墳4基・木棺直葬墳2基の調査を実施する。

6 嗎岡遺跡ほかは、一般国道176号道路新設改良工事に伴う継続調査である。試掘調査により径約12mの円墳1基・中世墓・柱穴等を検出している。また、縄文時代早期の土器片が多数出土することから縄文遺構の存在が期待される。

7 定山遺跡は、過去3度にわたり調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての集

落跡であることが判明している。

8 七百石遺跡ほかは、京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)建設に伴う調査である。七百石遺跡は、古墳時代から中世にかけての遺物散布地で、遺跡の性格や広がりを確認することを目的として実施する。このほか、古墳群4件(綾部市神宮谷4号墳・ジンド古墳



平成5年度 発掘調査予定遺跡位置図

群・木坂古墓・舞鶴市山根古墳)、集落跡2件(綾部市池の谷遺跡・舞鶴市桑飼上遺跡)の調査を予定している。

9 大島東遺跡は、由良川改修に伴う調査である。綾部市教育委員会の試掘調査により集落跡の一部が検出されている。

10 八木城跡ほかは、国道478号(旧国道9号)バイパス京都縦貫自動車道建設に伴う継続調査である。八木城跡の調査では、大手口にあたる城郭の一角及び武家屋敷の一部を検出している。今回は、大手口に張りだした曲輪の調査を実施する。このほか、八木町沢ノ古墳・園部町今林古墳の調査を予定している。

11 池尻遺跡は、大堰川左岸の平野部に位置する遺物散布地で、坊主塚古墳や時塚遺跡に隣接している。府道新設に伴う継続調査で、平成3年度の試掘調査では弥生時代前期及び奈良時代前期の遺構を多数検出している。

12 穴川遺跡は、住宅建設に伴う調査である。遺物の散布状況より弥生時代の集落跡であることが推察され、周囲に広がる太田遺跡や鹿谷遺跡等との関係が注目される。

13 太田遺跡ほかは、府営ほ場整備事業に伴う調査で、綾部市桜遺跡、亀岡市太田遺跡、八幡市魚田遺跡の調査を予定している。桜遺跡は、由良川支流の犀川上流部に開けた沖積平野に位置し、古墳時代から平安時代にかけての集落跡である。太田遺跡は、口丹波地域における弥生時代前期の環濠集落として知られており、今回はその一角の調査を実施する。魚田遺跡は、田辺町境に接する約1km四方の古墳時代を中心とする遺物散布地であり、今回試掘調査を行い遺跡の広がりや性格を明らかにする。

14～15 平安京跡関係では、2件の調査を予定している。14は府庁西側施設建設に伴うもので、平安京条坊復原図によると平安京左京一条二坊十四町・左獄跡に相当する。15は府警本部庁舎建設に伴う継続調査で、平安京左京一条三坊六町・修理職町に位置し、安土・桃山時代には旧二条城北西部にあたる。昨年度の調査では江戸初期の遺構面まで検出し、町屋の景観が復原できる成果をえ、また良好な金箔瓦が出土したことは聚楽第周辺の大名屋敷がこの付近まで広がっていたことが推察された。今回は、中世及び平安時代の遺構面の調査を実施する。

16 伏見城跡は、豊臣秀吉により文禄5(1596)年に築城されている。数次にわたり発掘調査が行われ大名屋敷跡や金箔瓦をはじめ多数の遺物が出土している。

17 若林遺跡は、伊勢田神社周辺に広がる弥生時代から奈良時代にかけての遺物散布地であり、昨年度に宇治市教育委員会によって試掘調査が実施されて、住居跡や溝等が確認されている。

18 内里八丁遺跡ほかは、国道1号バイパス京都南道路建設に伴う調査で、弥生時代の

稲株痕の残る水田面を検出し注目された内里八丁遺跡のほか、現地表面から横穴が確認されている荒坂横穴群、松井古墳状隆起の調査を行う。

19 北尻遺跡は、土師器等が出土する遺物散布地であるが、地割りから周濠をもつ前方後円墳とする説もあり、調査結果が期待される。

20 椋ノ木遺跡は、土師器等が出土する遺物散布地である。下水道施設建設に先立ち調査を実施する。

21 瓦谷遺跡ほかは、関西文化学術研究都市建設に伴う継続調査である。瓦谷遺跡は、昨年度の調査で古墳群及び埴輪棺を検出しており、今回は谷を隔てた丘陵台地部の調査を実施する。梅谷瓦窯跡・市坂瓦窯跡の調査は、平城京の官窯跡としてその成果が期待される。ほかに、中ノ島遺跡・釜ヶ谷遺跡・赤ヶ谷遺跡・上人ヶ平埴輪窯跡の調査を実施する予定である。

22 燈籠寺遺跡は、内田山丘陵に位置する弥生時代前期から奈良時代にかけての複合遺跡である。今回は、集落跡及び古墳の調査を行う。

23 植物園北遺跡は、弥生時代後期から古墳時代にかけての大規模な複合集落遺跡として知られている。今回、職員住宅建設に伴いその一角の調査を実施する。

24～25 長岡京跡関係では、2件の調査を予定している。24は名神高速道路拡幅事業に伴うもので、長岡京跡左京南一条四坊のほか下植野南遺跡・東土川遺跡等弥生時代から中世に至る遺跡が含まれる。25は府道拡幅工事に伴い長岡京跡右京六条三坊及び山崎国府跡の調査を行う予定である。

26 桑飼上遺跡は、由良川改修に伴い昭和62年から平成2年度まで調査を実施し、弥生時代中期から後期の集落跡や奈良時代の官衙的色彩のある建物跡群を検出している。今年度は整理作業を行い報告書を刊行する。

27 天若遺跡は、日吉ダム建設に伴い、平成元年度から4年度まで発掘調査を実施した。その結果、古墳時代後期を中心とした集落遺跡であり、広大な調査範囲から古墳時代の集落構造を解明する貴重な成果を得た。また、縄文時代の落し穴、奈良・平安時代の建物群のほか、旧石器時代から中世に至る各時期の遺物が出土した。今年度に整理作業を行って報告書を刊行する。

(みずたに・としかつ＝当センター調査第1課企画係長)

## 普及啓発事業

### (1) 埋蔵文化財セミナー

平成4年度まで実施してきた「研修会」を、府民により親しみやすい「埋蔵文化財セミナー」と名称を変更し、発掘調査の成果等を発表する。11月、2月の予定。

### (2) 小さな展覧会

平成4年度に京都府内で実施された発掘調査の成果を展示・報告する、第11回「小さな展覧会」を開催する。

#### 1. 日時

平成5年8月14日(土)～8月29日(日) 10:00～17:00 (月曜日休館)

#### 2. 会場

向日市文化資料館 京都府向日市寺戸町南垣内40-1

### (3) 特別講演会

長岡京跡発掘調査1,000回を記念に、特別講演会を実施する。

#### 1. 日時

平成5年8月1日(日) 13:30～17:00

#### 2. 会場

向日市民会館 ホール 京都府向日市寺戸町中ノ段17-1

#### 3. 主催

長岡京跡発掘調査1,000回記念講演実行委員会

#### 4. 内容

開会挨拶 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター常務理事 城戸 秀夫

開会にあたって 京都文教短期大学名誉教授 中山 修一

講演 「長岡京跡発掘調査の歴史」 (財)向日市埋蔵文化財センター長 山中 章

「中国の都城と日本の都城」 陝西省文物管理委員会助理研究員 黄 曉 芬

「冷泉家の成立－俊成・定家にふれて－」 同志社女子大学教授 龍谷 寿

絵括と展望 京都大学教授・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事 足利 健亮

## 平成4年度京都府内埋蔵文化財の調査

伊野近富

平成4年度に京都府内で行われた発掘調査は、153件を数える。その内、当調査研究センターが実施したのは43件である。以下では、主なもののいくつかについて、発掘成果の概要を紹介する。

### 旧石器・縄文時代

例年のとおり、この時期に属するものは少ない。遺構として確認されたものはほとんどなく、単独で出土した遺物がほぼすべてである。縄文時代草創期以前にさかのぼるものとしては、亀岡市鹿谷遺跡の黒曜石製尖頭器がある。ここでは後期の土器片も確認された。加悦町桜内遺跡でも後期の土器片が出土した。

遺構として注目されたのは、日吉町天若遺跡である。ここでは16基の落とし穴が確認された。いずれも径1m程度・深さ1~1.5mの土坑で、その底に径10cmほどの杭を立てたものである。以前の調査では6基確認されており、合計22基となった。当時の狩猟の一端が明らかとなった好例である。他に、土坑の中には上面に石が置かれたものがあり、墓となる可能性が高いものである。遺構ではないが、平安時代の庭園である京都市神泉苑跡の池跡近くから、後期の沼沢池が確認された。すなわち、この庭園は古くからある沼沢池をもとに庭園としたことが判明した。

### 弥生時代

前期に属するものとしては、長岡京市雲宮遺跡出土の彩文土器片がある。これは、整理作業中に確認されたもので、赤色が施されていた。乙訓地域では2例目である。中期については、弥栄町奈具谷・奈具岡遺跡がある。前者については、流路跡とそれに伴う板列が確認された。この東端には水取り口があり、側板に沿って半割した槽が杭で固定されていた。この下流にはトチの実が集積しており、<sup>ざる</sup>箕状の遺物も出土したことから、ここでトチの実のアク抜きをしていたらしい。流路の下層には包含層があり、丁字頭勾玉・木製高杯などが出土した。後者については、丘陵及びその斜面などから20基以上の竪穴式住居跡と溝・ピット・土坑等を確認した。これらの住居跡から緑色凝灰岩剝片や管玉未製品などの玉作り関連遺物が出土した。今回の資料では工具類もそろっており、緑色凝灰岩製管玉の



付表 平成4年度センター関係発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	薬師古墳群	古墳	熊野郡久美浜町	黒坪一樹	4.5.18～4.8.11	土壇状集石
2	遠所遺跡群	製鉄炉・ 窯跡ほか	竹野郡弥栄町	岡崎研一 尾崎昌之	4.4.13～5.2.25	炭窯跡, 住居跡等
3	奈良岡遺跡	集落跡	竹野郡弥栄町	増田孝彦 岡崎研一 田代 弘	4.5.26～4.10.22	竪穴式住居跡, 玉作り遺構
4	奈良谷遺跡	集落跡	竹野郡弥栄町	田代 弘	4.5.26～4.10.22	竪穴式住居跡, 玉作り遺構
5	中谷古墳群	古墳	竹野郡弥栄町	田代 弘	4.4.21～4.12.18	炭窯跡
6	左坂古墳群	古墳	中郡大宮町	石崎善久	4.9.24～4.11.12	表土掘削
7	里ヶ谷横穴	横穴	中郡大宮町	石崎善久	4.8.25～5.1.8	横穴5基
8	芋谷遺跡	生産地	中郡大宮町	増田孝彦 田代 弘	4.11.11～4.12.18	製鉄炉
9	鳥取古墳群	古墳	竹野郡弥栄町	岡崎研一	4.9.24～5.2.25	古墳2基(円墳), 木棺直葬
10	ニゴレ遺跡	製鉄炉・ 窯跡ほか	竹野郡弥栄町	岡崎研一	4.9.24～5.2.25	製鉄炉跡, 炭窯跡, 竪穴式 住居跡
11	桜内遺跡	散布地	与謝郡加悦町	黒坪一樹	4.11.27～5.2.25	平安～中世; 流路跡, 溝, 柱穴, 土坑
12	嗎岡遺跡	集落跡・ 古墳	与謝郡加悦町	石崎善久 尾崎昌之	5.1.18～5.2.25	円墳
13	下岡古墳	古墳	与謝郡加悦町	黒坪一樹	4.9.22～4.12.11	円墳, 木棺直葬
14	定山遺跡	集落跡	与謝郡岩滝町	石崎善久	4.5.18～4.8.27	竪穴式住居跡, 布目瓦
15	神宮谷古墳	古墳	綾部市	岸岡貴英	4.10.19～5.3.5	古墳2基(石室築造)
16	細谷古墳群	古墳	綾部市	小池 寛	4.5.18～4.7.4	古墳3基, 横穴式石室
17	天若遺跡	集落跡	船井郡日吉町	三好博喜 野島 永 八木政明	4.4.20～4.9.18	竪穴式住居跡, 掘立柱建物跡
18	八木城跡	城跡	船井郡八木町	引原茂治	4.5.18～5.3.5	階段状石組み, 集石, 礎石 建物跡
19	古谷窯跡	窯跡	船井郡八木町	引原茂治	4.5.18～4.6.29	
20	鹿谷遺跡	集落跡	亀岡市	河野一隆 野島 永	4.6.12～4.8.6 4.9.12～4.11.13	竪穴式住居跡, 土坑, 溝
21	祇園谷遺跡	散布地	北桑田郡京北町	小池 寛	4.7.6～4.8.11	掘立柱建物跡
22	日置遺跡	散布地	船井郡八木町	小池 寛	4.8.10～4.9.2	顕著な遺構・遺物なし
23	上中遺跡	集落跡	北桑田郡京北町	野島 永	4.5.25～4.7.24	顕著な遺構・遺物なし
24	平安京跡(住宅)	都城跡	京都市	小池 寛	4.9.24～4.11.13	掘立柱建物跡
25	平安京跡(堀川)	都城跡	京都市	柴 暁彦	4.5.6～4.6.29	顕著な遺構・遺物なし
26	平安京跡(府警)	都城跡	京都市	森島康雄	4.6.22～5.3.4	旧二条城堀跡?, 近世遺構
27	平安京跡(西別館)	都城跡	京都市	三好博喜	4.12.8～5.2.19	表土除去・近世遺構
28	植物園北遺跡	集落跡	京都市	竹原一彦	4.9.22～5.2.8	古墳時代; 流路跡, 土坑 平安～中世; 柱穴, 土坑
29	長岡京跡(名神・京都)	都城跡	京都市	戸原和人 竹井治雄 石尾政信	4.5.11～5.3.2	条坊側溝, 柱穴 左京第286次
30	長岡京跡(名神・下 植野)	都城跡	乙訓郡大山崎町	竹井治雄 岩松 保 中川和哉 鍋田 勇	4.4.8～5.3.5	竪穴式住居跡, 掘立柱建物跡 溝 右京第395・368次
31	長岡京跡(名神・大山 崎)	都城跡	乙訓郡大山崎町	石尾政信 岩松 保	4.4.8～5.3.4	流路跡, 竪穴式住居跡 右京第394次

32	長岡京跡(乙訓土木)	都城跡	長岡京市	石尾政信	4.9.24~4.11.20	柵列, 井戸, 土坑 右京第411次
33	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	竹原一彦 筒井崇史	4.4.23~4.12.18	掘立柱建物跡, 溝, 井戸
34	荒坂遺跡群	散布地	八幡市	伊賀高弘	4.10.13~5.2.25	古墳周溝
35	新田遺跡	集落跡	綴喜郡田辺町	森正哲次	4.11.4~5.2.25	遺物包含層, 顕著な遺構なし
36	大切遺跡	集落跡	綴喜郡田辺町	有井広幸	4.5.19~4.7.5	竪穴式住居跡, 溝
37	今城跡	城跡	相楽郡山城町	森正哲次	4.5.6~4.6.12	顕著な遺構・遺物なし
38	燈籠寺遺跡	集落跡	相楽郡木津町	石井清司 森正哲次	4.6.1~4.9.4	竪穴式住居跡, 古墳
39	西山遺跡	集落跡	相楽郡木津町	石井清司	4.4.20~4.9.18	顕著な遺構・遺物なし
40	瓦谷遺跡	墳墓	相楽郡木津町	有井広幸 石井清司	4.7.1~5.3.5	古墳周溝, 埴輪棺, 溝
41	瓦谷古墳	古墳	相楽郡木津町	有井広幸 石井清司	4.7.1~5.3.5	前方後円墳
42	西山塚古墳	古墳	相楽郡木津町	伊賀高弘	4.4.6~4.9.18	円墳, 木棺直葬
43	燈籠寺遺跡	集落跡	相楽郡木津町	小池 寛	5.2.18~5.3.5	

生産工程を明らかにすることが可能となった。また、水晶製の玉生産もあわせて行われたらしく、水晶剥片や原石、管玉状の未製品が出土した。このように、玉作りの工房群が確認されたことで、弥生時代の玉作りの技術復元とともに、社会構造の一端を鋭く描き出せる資料となった。墳墓遺構については、亀岡市天川遺跡で11基の方形周溝墓が確認された。また、宇治市乙方遺跡でも方形周溝墓が1基確認された。ここでは円形竪穴式住居跡も2基確認されており、宇治川に近い低地の開発が明らかとなった。田辺町南垣内遺跡では府内最大級の方形周溝墓(東西20m・南北16m)1基が確認された。住居跡関係では長岡京市今里遺跡や、高地性集落として知られる田辺町飯岡遺跡などがある。トピックスとしては、京都市烏丸綾小路遺跡で、壺の体部外面に線刻で建物を描いたものがみつかった。整理作業中に確認されたもので、渦巻き状の屋根飾りのあるものとしては、大和一带以外では初めてである。

中期末から後期初頭としては大宮町左坂古墳群・三坂神社墳墓群がある。ここでは5,000個に上るガラス製小玉が、台状墓12基に集中して出土した。更に、後者では大陸製と考えられる素環頭鉄刀が1点出土した。北九州に分布の中心があり、近畿では初出である。後期末に属するものとしては、綾部市庄村遺跡がある。ここでは、6基の方形周溝墓が検出された。密集しており、周辺に広がる可能性が高い。今後、居住域との関係が注目される。

#### 古墳時代

前期に属する調査例としては、三角縁神獣鏡が多数出土したことで知られる山城町椿井大塚山古墳がある。民家の建て替え工事に伴う今回の調査と、以前の調査成果から後円部の規模が、南北約80m・東西約90mの楕円形であることが確認された。なお、発見から39

年ぶりで、鉄製の出土物が冠であることが、京都大学での整理作業中に確認された。前半期としては、木津町瓦谷遺跡がある。ここでは、前方後円墳、円墳、方墳など合計9基の古墳が確認され、形式の違う古墳が同一か所に造営されていることから、古代の身分制度を知る上で貴重な資料となった。各古墳に使用された埴輪は円筒埴輪のほか、形象埴輪もあり、特に盾形埴輪は3タイプ確認された。長岡京市神足遺跡では弥生時代中期と古墳時代初頭の方形周溝墓が13基検出され、墓地を含めた集落構造を解明する資料となった。

中期に属する調査例としては、木津町西山塚古墳がある。直径26mの中規模の円墳で、竪穴系の埋葬施設が墳丘の構築と連動する形で、上下に重層して設置されていた。埋葬施設は、底板を略して礫敷にする点などから、山陰～丹後地方にみられる要素が指摘された。加悦町下岡古墳は、直径11.5mの円墳である。主体部は木棺直葬で、その周囲に6か所のピットが確認された。ピットは杭跡と考えられ、一定の構築物が主体部をおおっていたことが判明した。これは葬送儀礼に伴う喪屋と判断されている。

後期に属する調査例としては、福知山市下山古墳群がある。以前から合わせて95基の古墳が確認された。1基ごとの規模は小さく、直径3～4mほどのものが多い。この地域の群集墳を考える上で、貴重な資料となった。綾部市神宮谷古墳では、横穴式石室が確認されたが、一度縮小して再構築をしていたことが判明した。亀岡市鹿谷遺跡では、35基の竪穴式住居跡が検出された。出土遺物の中には若狭型製塩土器もあり、この地域との交流をうかがうことができた。また、同じ鹿谷遺跡では中期末にさかのぼる住居跡も検出されており、古墳時代における一大集落であったことが判明した。京北町昇尾古墳は直径12mの円墳で、主体部は横穴式石室である。この地域の調査例は少なく、貴重な例となった。京都市鶴塚は、岡崎公園内にある古墳であるが、昭和30年までは陵墓参考地で火葬塚とされていた。調査の結果、内径20mの円墳であることが判明した。城陽市恵美塚は、かつては円墳と推定されていたが、一辺が14mの方墳で、しかも幅2.5mの造り出しを付設していたことが判明した。主体部は木棺直葬である。大山崎町下植野南遺跡では、6基の竪穴式住居跡が確認され、うち1基からムシロを敷いた跡も検出された。

古墳時代の終末頃の成果としては、大宮町里ヶ谷横穴がある。6基確認されたが、その内3基が6世紀末頃であり、ちょうど丹後に横穴が導入された時期に相当し、その実態を解明する上で貴重な資料となった。また出土人骨は、追葬時に横穴隅に片づけられた状況を示しており、葬送を考える上で注目される。

#### 奈良・平安時代

宮津市丹後国分寺跡隣接地の調査で、築地塀の基礎、もしくは土塁や雨落ち溝が検出された。築地状遺構は、金堂跡と中門跡を南北に通る伽藍中軸線の西側57mの地点にあり、

当時の約半町に近い。今まで国分寺の遺構は確認されておらず、今後、全体像を解明する上で大きな手がかりとなった。大宮町芋谷遺跡では、長方形の箱形炉の基底部が良好な状態で確認された。京北町祇園谷遺跡は、周山廃寺から川を挟んで東方にあり、ここで掘立柱建物跡を検出した。建物跡の主軸は磁北と一致する群と27度東に振るものの2種ある。長岡京跡右京第412次の調査では「次官」と墨書された土師器皿が出土し、奈良時代の郡衙が存在した可能性が高まった。長岡京跡右京第403次調査では、倉庫と思われる柱間2間×2間あるいは3間の総柱建物跡6棟が検出された。八幡市内里八丁遺跡では、奈良時代と思われる須恵器の香炉?が発見された。

恭仁宮の発掘調査では、門と築地塀跡が確認され、宮の東限が確定した。宮の推定中心線から東へ270~290mほどの地点が東限となり、これは平城宮の約半分の距離と判明した。前年度には南限が確定し、今後四周を確定するのは時間の問題となった。これからはなぜ平城宮よりミニサイズになったのかについて深い議論が要望される。また、初期の大規模建物跡が確認され、第3次山城国府跡が、現在の町役場周辺である可能性が高まった。

長岡京期の成果としては、左京第287次調査で、全国初の木製笏が出土した。裏面には「○風○」と3文字墨書されていた。ここは、桓武天皇が平安京造営の際、遷都準備のため長岡宮域から移り住んだ「東院」跡とみられる遺構群の西側である。左京第290次の調査では、二条条間大路(新二条大路)の南側溝と、東二坊大路の交差点が確認された。また、大形の墨描人形も発見された。右京第410次調査では、杭と側板をもつ護岸施設や凝灰岩の切石を伴う橋台基礎と思われる集石が確認された。向日市中海道遺跡第22次調査では、長岡京北方にもかかわらず、長岡宮式鬼面文鬼瓦が出土し、宮や寺院関係の遺跡の存在がうかがわれる。左京第288次調査は、以前の調査で古代の土地制度である代制の存在を示したとされた地点の近隣で行われた。長岡京の表示(旧表示)では左京六条三坊二町域に相当し、掘立柱建物跡16棟が確認された。同時期には7~9棟であるが、これらの建物跡は1町の南西隅、東西45m(15丈)×南北30m(10丈)の範囲に集中しており、京域の居住状況を知る上で恰好の資料となった。左京第295次調査では、「かほちゃ型」をした分銅が発見された。上面に環状の釣り手と体部外面には花卉状の飾りを施したもので、高さ3cm、重量は134.68gである。京都市川原寺跡では、同寺と思われる門や橋跡を検出した。長岡京内にあり、長岡京七大寺の1つである。

平安時代に属する調査成果としては、まず、生産遺跡として舞鶴市白石浜遺跡がある。これは土器製塩場であり、このような発掘成果はなかっただけに、消費状況とも併せて今後大いに注目される。京都市植物園北遺跡は、平安京北方に所在する。ここでは掘立柱建物跡などが検出され、物資の管理や保管場所かと推測されている。平安京跡現二条城南側

の調査では、平安京遷都時の大規模な建物跡が検出された。平安京淳和院跡では、前期に属する3時期に区分できる遺構群が確認された。文献等で知られる敷地は2町四方であるが、発掘調査地は院の南西隅と考えられている。特に、第2期の遺構は火災をうけた状況が判別でき、文献との照合が可能であるらしい。長岡京市今里畔町では、前期の倉庫跡が確認された。長岡京跡右京第401次調査では、大型建物跡群や溝・柵などが確認され、豪族の邸宅と推定される。大山崎町百々遺跡では、前期に属する銅製の鈴(直径2cm前後)の保存処理が終わり、紹介された。大山崎町山城国府跡では、山陽道の路面がバラス敷であったことが確認された。

後期に属するものとしては、京都市勸業館跡地の調査がある。ここは六勝寺の1つである成勝寺の伽藍中心地と推定されていたが、井戸15基が検出され、位置を再検討する必要が生じてきた。遺物では鳳凰の文様を施した小形の瓦が出土し、その大きさから屋内で使用されたものかとの見方もある。京都市旧国鉄梅小路貨物駅跡地では、平清盛の邸宅跡が確認されたが、遺構は盛り土保存された。宇治市平等院では、池の中島に建てられた礎石建物跡が確認された。これは『中右記』などで紹介されている「小御所」と断定された。徐々に平等院の実態が明らかとなってきた。京都市田中殿跡は、平安京の南方に推定されていたが、これに伴う建物の基礎が確認された。

## 中世

平安時代末期から鎌倉時代に属するものとしては、加悦町桜内遺跡がある。従来、丹後での中世土器編年は、良好な資料がないこともあって、確立していないのが現状である。今回、井戸一括資料では、黒色土器椀・土師器皿とともに、丹波型の瓦器椀が出土した。丹波国瓦器椀については、一応の編年が確定しており、これをキーとして、井戸一括資料は12世紀中葉と推定された。編年の1点が押さえられたことによって、丹後の中世土器研究が進展する可能性が生まれた。福知山市上ヶ市では、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての居館が確認された。標高30mの台地上に立地し、遺構は南北180m×東西130mの範囲に及ぶ。外囲いの大きな堀(幅約4m・深さ約1.5m)の中を、約50m四方の区画で3分割しており、その中に掘立柱建物跡20棟ほどを配置しているのが確認された。おそらく在地領主の居館と思われ、今後、雀部荘の一角でもあるので荘園管理構造の一端を明確にできた資料として注目されよう。綾部市庄村遺跡では、13世紀の3棟の掘立柱建物跡が確認された。近くに小畑荘と呼ばれる荘園があり、そこから独立した新しい荘園「新荘」を支配していた人たちが住んでいたのかと推測されている。田辺町宮の口遺跡では、鎌倉時代後期の有力農家とみられる遺構が確認された。建物跡の中には3m×11m以上の細長いものがあり、廐と推定されている。また、曲物を据えた井戸も検出された。

山城町光明山寺跡の調査では、これまで実態がわからず「幻の寺」とされていたが、坊院の一部である門の礎石や築地塀、石段などが初めて見つかった。南山城の平野から山奥に入った、いわゆる山岳寺院の1つであり、あまり、実態のわからないこれらの寺院を解明する上で、画期的な調査となった。また、坊院の西30mからは、鎌倉時代中期の石組みの水洗トイレも見つかった。なお、この寺は『平家物語』にも描かれている。すなわち、以仁王が平家の軍勢に追われた際、ここで最期を遂げたというものである。

室町時代に属するものとしては、京都市中京区烏丸三条上ルの庭園遺構がある。15世紀中頃の邸宅の一部で、遺構としては池(東西11m・南北9.5m・深さ1.5m)があり南東隅に石を積み重ねた滝口、北東部に遣り水とみられる溝も検出された。また、遺物としては、中国製陶器の枕が発見された。これは14世紀中頃の磁州窯製である。そして、南宋時代の龍泉窯系青磁水指も発見された。これは、重要文化財の「青磁浮牡丹文太鼓胴水指」とウリ二つであるという。これらの点から邸宅の主は有力な貿易商か武士と推測されている。向日市物集女城跡の調査は、今まで本格的な調査がされていなかったが、堀や井戸が確認された。城跡は室町時代に付近一帯を支配していた土豪・物集女氏が16世紀に建造されたといわれるが、現在遺存している土塁や堀により、東西100m・南北75mと推定されているのみで、実態は不明のままであった。今後の城跡解明に手がかりとなる資料が得られた。

戦国時代末期に属するものとしては、八木町八木城跡がある。八木城は丹波守護代、内藤氏の居城として知られ、キリシタン武将である内藤ジョアンゆかりの城としても知られる。今回は、山頂を中心とした本丸部分とは違い、山麓部分に当たり、あまり注目されていなかった部分である。調査の結果、丘陵を削って平坦地を造成し、石垣で囲んだ郭が検出され、その内部で礎石も発見された。おそらく、有力家臣の屋敷跡や隅櫓などと考えられる。京都市中京区府警本部敷地の調査では、200点に及ぶ金箔瓦が出土した。瓦は桃山時代のもので、おそらく、聚楽第を取り巻いていた大名屋敷で使用されたものと推測される。聚楽第は天正14(1586)年に創建されたが、10年余りで壊された。今回の瓦は、破片となって江戸時代初期に築かれた溝の補強材料として使用されており、聚楽第の盛衰と合致しており興味深い。また、旧二条城関係と思われる堀も検出された。

近年の発掘調査によって知られてきたこととして地震跡がある。亀岡市鹿谷遺跡では、古墳時代後期の住居跡を割く形で、地震の正断層が確認された。断層の落差は12cmもあり、その規模の大きさから慶長大地震(1596年)のものと推測された。京都市智積院では、豊臣秀吉が夭折した愛児・鶴松の供養のため建立した祥雲禅寺の遺構が確認された。今回確認されたのは法堂の跡とみられ、東西36m・南北23mの範囲に、1辺1m以上の巨石が配置されていた。

## 近世

江戸時代前期に属するものとしては、京都市二条城南側外濠に沿った押小路通の調査がある。これは、地下鉄東西線建設に伴う事前調査で確認されたもので、この通りが基礎土の上に小石の層(厚さ3cm)、その上に白砂層(1~2cm)を敷いたものと判明した。この白砂の道は、二条城近隣に及んだとされ、諸大名の登城に備えていたのではと推測されている。京都市中京区姉小路通烏丸東入ルでは、前期に属する志野や織部、「仁清」の銘入りの京焼など多彩な陶磁器が出土した。この他、「天下一」「元和」などと記した硯や漆器椀なども出土した。ここは、古絵図や文献によって小判や一分金などを鑄造する金座の主宰者である後藤庄三郎の邸宅跡とされ、幕府の財政に深く関わる御用達町人の生活の一端をうかがうことができた。長岡京市勝竜寺城跡では、山崎の合戦で明智光秀とともに落城した後、江戸時代(1633年)に永井直清が約600m北に再築をしたが、その屋敷跡5棟が確認された。これらの屋敷跡は、現存している城下町絵図と合致することも判明した。

中期に属するものとしては、京都市下京区烏丸通四条下ルで検出された方形石組遺構がある。これは当時の地表面から約2.5mの深さに掘り込み、周囲には花崗岩で石組をしていた。底には2基の井戸があり、貯水施設として使用されたい。方形石組遺構の北東隅部分に石段が3段築かれていたほか、石組に水を注ぎ込む導水施設(幅30cm・深さ15cm)も確認された。宇治市乙方遺跡では、瓦窯の一部と平等院に使われているのと同じ文様の軒平瓦などが出土した。瓦窯跡は東西5m・南北20mで、ほぼ江戸時代を通して操業していたことが判明した。文献などから平等院阿弥陀堂改修の瓦を焼いた、瓦師藤原源左衛門の瓦窯跡ではないかと推測されている。

幕末に属するものとしては、京都市左京区京都大学理学部構内で検出された堀跡がある。幅2.9m・深さ0.9~1.1mで、堀の東部分からは多量の瓦片も出土した。当時の絵図によれば、今出川通に面して土佐藩邸を構えていたことが知られ、今回はその南側部に当たる。幕末の京都では、鴨川の東側でも新屋敷が建設された。今後、藩邸の正確な位置や広がりを知る手がかりとなる成果となった。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第1係長)

## 長岡京条坊制地割計画の再検討(上)

鍋田 勇

1. はじめに
2. 検出条坊側溝の検討
  - (1)南北路
  - (2)東西路(以下、次号)
  - (3)大路の規格
3. 長岡京条坊制地割計画の復原
4. おわりに

### 1. はじめに - 研究略史と問題の所在 -

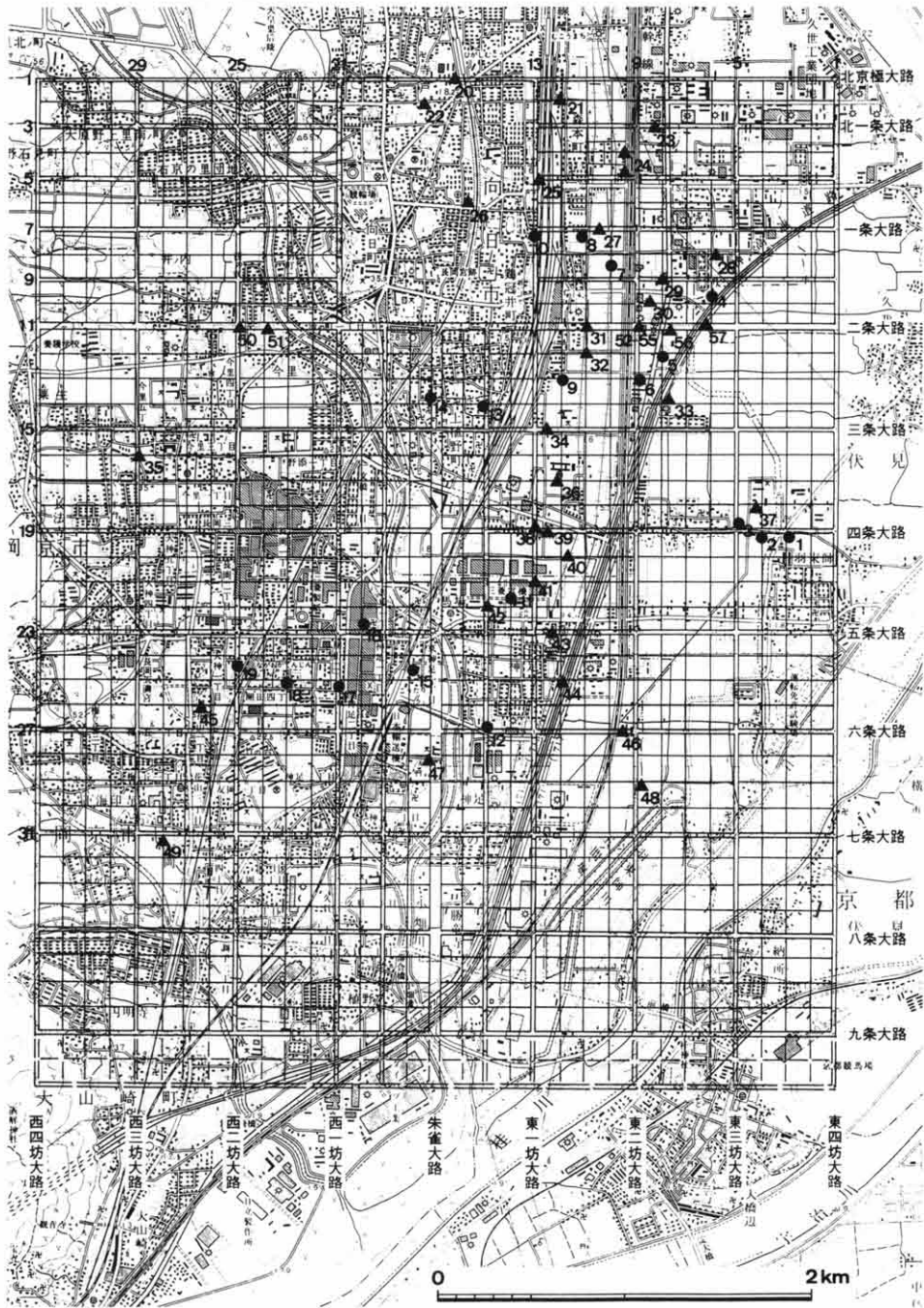
長岡京の条坊制は、平安京型による復原が提唱された後、発掘調査データに基づき平城京型復原へと変更されるに至った。その後の研究は、発掘調査によって確認される条坊データと平城京型復原案との矛盾をいかに解釈するかという方向性で進んできたといえる。

特に大きな矛盾点として、A. 東西路の大路が小路規模であり、条間小路が大路規模であること、B. 四条条間大路以南の東西路が、計画線よりも南へ大きくずれること、の2点があげられる。Aについては、従来の復原案に二町分のずれのあることが明白であり、二条条間大路の路面幅が他の大路に卓越することにより、これを二条大路とする、つまり二町分北へずらす山中説が有力となった。(以下、条坊の呼称に関しては、山中氏の示された案に従うものとし、必要に応じて旧呼称を「 」で使用する。)

Bに対しては、a. 「五条条間大路」の拡幅、計画線の途中に付帯を考慮、b. 四条・五条付近の1尺の実長を他よりも長く(1尺=0.303m)考慮、c. 条里地割の影響を考慮する説等がある。aは「五条条間大路」や他の条坊側溝の検出により今日では成立しないが、b・cについても定説とはなっていない。

さて、前述の山中説は、単に条坊呼称の変更のみならず、従来の平城京型による条坊の復原を根本的に見直し、平安京と共通したいわゆる集積型による「長岡京型」を提唱するとともに、その歴史的意義を古代条坊制の変遷過程のなかで捉えようとしたものである。この「長岡京型」条坊制復原案は、上記の矛盾をあくまで一元的な条坊制によって解消することを試みているが、一坊(条)の基準距離の基点に築地を使用すること、復原案の位置と検出された条坊側溝の位置が必ずしも一致しないこと等の疑問点も存在する。





第1図 条坊制溝調査地位置図

- ※1 番号は、文献No.と対応する。ただし、50～57は第2図(次号)と対応する。
- ※2 条坊図は、従来の平城京型を二町北へ上げ、一部を改変して作成した。

これまでの研究史からも明らかのように、長岡京の条坊制は、平城京型によって説明可能な事例も数多く確認されている。しかし、総合的に条坊側溝データが分析されたことは少なく、改めて基礎的作業が必要と考えられる。小稿では、この作業を通じて、長岡京の条坊制の特徴について考えてみたい。

## 2. 検出条坊側溝の検討

検討の対象とする資料は、条坊側溝として確定視されるものを抽出し、南北(東西)両側溝は、なるべく同一の調査地点で検出されたものを採用した。また、長岡京では条坊の振れが比較的小さいため、今回の検討に際しては正方位と仮定して作業を行う。

具体的な作業方法は、平城京型との比較<sup>(注9)</sup>を目的として、これまでに検出されている条坊両側溝から側溝心間中央(路心)の国土座標を算出し、一坊を1800小尺<sup>(注10)</sup>(1500大尺)、一町を450小尺(375大尺)とする条坊計画線との対比を行う。

### (1)南北路

南北路は、京の中心軸を朝堂院心( $x = -26,840.40$ )として計画線を算出する。

付表1から、その特徴をみると、誤差には大きなばらつきがあるものの、大路については、東三坊・西二坊大路の路心が計画線上に位置する。東・西一坊大路は、従来から指摘されているように、それぞれ、東・西側溝が計画線上に位置し、宮城側に路面を確保する。つまり、大路では、東二坊大路を除くと計画線に基づいてその位置が決定されている。これに対し、小路については誤差が大きく、一見規則性が見いだせない。

さて、大路・小路より形成される計画的な都市開発を行う場合、都市の骨格となる大路の位置がまず決定されたと考えられる。その意味で、一坊を1800尺とする条坊計画線上に各大路が位置していることは重要であり、少なくとも大路に関しては、平城京型を踏襲する位置の決定がなされたと見るべきであろう(均等計画線地割型と呼称する)。

次に小路の配置をみると、明らかに平城京型とは異なる様相を呈している。つまり、小路では、一坊の1800尺を四分割した一町450尺の計画線は、使用されていない可能性が高い。付表2は、条坊側溝の検出例が多い朱雀大路～東三坊大路間についてさらに検討を行ったものである。すでに記したように、大路では東二坊大路のみが計画線上からのずれがやや大きい。しかし、東二坊大路の両側の大路である東一坊・東三坊大路との関係に着目すると、東二坊大路と両大路との間に次のような関係を見いだすことができる。

東二坊大路の路心は、東一坊大路の東側溝(S D 21013)と東三坊大路の西側溝(S D 09936)の中央にほぼ等しい。すなわち、東二坊大路の位置は、両側の大路である東一坊大路と東三坊大路のそれぞれ内側の側溝を基準として決定された可能性を指摘できる。その

付表1 南北路検出側溝一覧表

No.	坊路名	検出遺構	国土座標 y=	計画位置	誤差*		文献
3	東四坊坊間小路	東 SD17412	-24,962.30	-24,975.60	-8.8m	29.7尺	1
		西 SD17413	-24,966.83 -24,971.35				
4	東四坊坊間西小路	東 SD059B15	-25,095.20	-25,108.80	-9.1m	30.7尺	2
		西 SD059C01	-25,099.71 -25,104.21				
5	東三坊大路 83.4尺	東 SD09927	-25,228.40	-25,242.00	-1.3m	4.4尺	3
		西 SD09936	-25,240.75 -25,253.10				
6	東三坊坊間東小路	東 SD26708	-25,376.10	-25,375.20	+5.7m	19.1尺	4
		西 SD26707	-25,380.85 -25,385.60				
8	東三坊坊間西小路 30.4尺	東 SD13405	-25,637.10	-25,641.60	0m	0尺	5
		西 SD13406	-25,641.60 -25,646.10				
9	東二坊大路 80.6尺	東 SD19602	-25,767.50	-25,774.80	+4.6m	15.5尺	6
		西 SD19601	-25,779.43 -25,791.35				
10	東二坊坊間東小路 27.9尺	東 SD21130	-25,914.00	-25,908.00	+10.1m	34.1尺	7
		西 SD21103	-25,918.13 -25,922.25				
11	東二坊坊間小路 30.3尺	東 SD01406	-26,046.40	-26,041.20	+9.8m	33.0尺	8
		西 SD01402	-26,050.95 -26,055.50				
12	東二坊坊間西小路 29.9尺	東 SD12031	-26,177.81	-26,174.40	+7.8m	26.3尺	9
		西 SD12032	-26,182.23 -26,186.65				
13	東一坊大路 83.5尺	東 SD21013	-26,308.75	-26,307.50	+1.3m	4.2尺	10
		西 SD21003	-26,321.11 -26,333.47		+13.6m	46.0尺	
14	東一坊坊間東小路 30.4尺	東 SD19921	-26,444.60	-26,440.80	+8.5m	28.7尺	11
		西 SD19919	-26,449.25 -26,453.90				
15	東一坊坊間大路 81.8尺	東 SD18404	-26,562.50	-26,574.00	+0.6m	2.0尺	12
		西 SD23235	-26,574.60 -26,586.70				
17	朱雀大路	東		-26,840.40			
		西 SD16103	-26,867.55				14
18	西一坊坊間東小路 32.3尺	東 SD40127	-26,982.40	-26,973.60	+12.8m	43.2尺	15
		西 SD40178	-26,986.43 -26,990.45				
20	西一坊坊間西小路	東 SD27832	-27,230.60	-27,240.00			16
		西					
21	西一坊大路 84.1尺	東 SD16507	-27,348.60	-27,373.20	-12.2m	41.2尺	17
		西 SD16503	-27,361.05 -27,373.50		-0.3m	1.0尺	
23	西二坊坊間小路 29.1尺	東 SD19404	-27,627.48	-27,639.60	-7.8m	26.4尺	18
		西 SD19402	-27,631.77 -27,636.06				
25	西二坊大路 45.3尺	東 SD09040	-27,898.30	-27,906.00	-1.0m	3.4尺	19
		西 SD09039	-27,905.00 -27,911.70				

\*誤差の+は計画位置から西へ、-は東へのずれを表す。

中心座標を求めると(基準Ⅰ)、検出された路心とのずれは約5尺となり、均等計画線とのずれに比べ大幅に縮小されることがわかる。

同様の方法で東二坊坊間小路についてみると、東二坊大路西側溝(SD19601)と東一坊大路東側溝(SD21013)の中心座標は(基準Ⅱ)、検出された実際の路心とほぼ一致する。また、東三坊坊間小路は、両側溝とも検出されていないが、中心座標は基準Ⅱによって求めることが可能であり、側溝心間を30尺と仮定して坊間東西小路の中心座標を計算する

付表2 朱雀～東三坊大路地割基準線一覧表

坊路名	検出側溝	国土座標	基準Ⅰ	基準Ⅱ	基準Ⅲ	誤差*	
						(m)	(尺)
東三坊大路 83.4尺	東 SD09927	-25,228.40					
	西 SD09936	-25,240.75	-25,253.10	-25,253.10	-25,253.10		
東三坊坊間東 32.1尺	東 SD26708	-25,376.10	↑	↑	↑ (-25,379.48)	+1.4	4.7
	西 SD26707	-25,380.85			↓ (-25,505.86)		
東三坊坊間	東						
	西			-25,510.30	↓ (-25,514.74)		
東三坊坊間西 30.4尺	東 SD13405	-25,637.10			↑ (-25,641.12)	+0.5	1.7
	西 SD13406	-25,641.60			↓		
東二坊大路 80.6尺	東 SD19602	-25,767.50	-25,780.93	-25,767.50	-25,767.50	-1.5	5.1
	西 SD19601	-25,779.43		-25,791.35	-25,791.35		
東二坊坊間東 27.9尺	東 SD21130	-25,914.00		↑	↑ (-25,918.88)	-0.8	2.5
	西 SD21103	-25,918.13			↓		
東二坊坊間 30.3尺	東 SD01406	-26,046.40			↓ (-26,046.40)	+0.9	3.0
	西 SD01402	-26,050.95			↑ (-26,055.50)		
東二坊坊間西 29.9尺	東 SD12031	-26,177.81			↑ (-26,182.13)	+0.1	0.3
	西 SD12032	-26,182.23			↓		
東一坊大路 83.5尺	東 SD21013	-26,308.75	-26,308.75	-26,308.75	-26,308.75		
	西 SD21003	-26,321.11	-26,333.47	-26,333.47			
東一坊坊間東 30.4尺	東 SD19921	-26,444.60	↑	↑ (-26,447.99)		+1.3	4.4
	西 SD19919	-26,449.25			↓		
東一坊坊間 81.8尺	東 SD18404	-26,562.50			↓ (-26,562.50)		
	西 SD23235	-26,574.60	b		↑ (-26,586.70)		
東一坊坊間西	東	-26,586.70					
	西				c		
朱雀大路	東	a	a	a			
	西 SD16103	-26,867.55					

\* 誤差の+は計画位置から西へ、-は東へのずれを表す。

と(基準Ⅲ)、実際の路心とほぼ一致する値を得ることができる。したがって、東一坊大路～東三坊大路間では、まず両大路の位置が決定された後、その内側の側溝を新たな基準線として東二坊大路の計画線が、さらに坊間小路→坊間東西小路の順に計画線が決定される方法が採用されたと考えられる。

また、この地割方法は、右京域でも確認することができる。西一坊坊間東小路は、従来の計画線とのずれが12.8mもあるが、西一坊坊間小路の中心座標を朱雀大路西側溝と西一坊大路東側溝から求め、坊間小路の幅を30尺と仮定して、その東側溝と朱雀大路西側溝との中心を算出すると、約0.8mのずれしかなくなる。なお、西二坊坊間小路は、西一坊大路西側溝と西二坊大路東側溝の中心を路心とせず、西側溝の位置としており、他の坊路と異なっている。

このような地割の方法は、長岡京のみで認められ、平城京型を改良したものとして位置づけられる。平城京では、すべての大路・小路に対して均等な計画線が使用されているが、長岡京の南北路では、大路のみを均等計画線で配置し、(東二坊大路→)坊間小路→坊間東西小路の順に段階的に計画線が決定されている(段階的計画線地割型と呼称する)。これらの計画線は、左京・右京の各坊内で認められることから、南北路の地割方法として当初から計画されたものと考えられるが、実際の施工に当たっても計画線の導きだされる大路→坊間小路→坊間東西小路の順に施工されたと考えられよう。

段階的計画線を採用する目的は、平城京型では、一町の幅が大路・小路との接し方によって大幅に異なる点を解消するためである。つまり、一坊の東西幅は、大路が均等計画線で配置されることにより決定されるが、坊間小路・坊間東西小路の配置を工夫することによって同一坊内の一町の東西幅を等しくすることが可能となる。ある一定の幅を四分割する場合、まずその中央で分割し、次に分割された区画の中央をさらに分割することが最も単純な方法といえる。平城京の均等計画線は、見方を変えれば計画線のみをこの方法によって配置した方法とも解釈できるが、大路・小路の幅を無視しているために一町の幅が異なるという結果を招いた。長岡京では、一坊を四分割する際に大路幅を差し引くことによって、実質的な一坊の幅を対象として分割したといえる。具体的には、大路によって挟まれた区画(両端側溝間)の中央に新たな計画線を設定し、坊間小路(東二坊大路含む)路面をこの計画線から均等に確保すれば、その両側の区画は均等に分割される。次に坊間東西小路を配置する場合、坊間小路の幅を差し引いて同様の方法をとる。このようにして、各大路内の一町の側溝心間距離はきわめて等質的となった。ただし、この方法では、同一坊内の一町幅が等しくなるのみであり、特に朱雀大路(注11)と東一坊大路に挟まれる一坊では、一町平均372尺で、二・三坊の平均413尺よりも41尺狭くなっている。もし、当初から集積型

の発想があったとするなら、一坊の一町幅をこのように狭くする必然性は存在しないはずである。長岡京の南北路は、あくまで平城京型から脱却しきれておらず、その改良型として理解すべきであろう。

(以下、次号)

(なべた・いさむ=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 中山修一「長岡京条坊の復原」(『乙訓文化遺産』2) 1967
- 注2 高橋美久二「日本の古代都市長岡京」(『地理』第25巻9号) 1980  
 中山修一「長岡京の条坊」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1981  
 山中 章「都京の形成」(『向日市史』上巻 第6章第1節) 1983
- 注3 山中 章「長岡京から平安京へ」(『古代の日本』近畿II 角川書店) 1991  
 山中 章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号) 1992
- 注4 吉本昌弘「長岡京条坊プランに関する一試論」(『長岡京』第20号 長岡京跡発掘調査研究所) 1981
- 注5 宮原晋一「長岡京における造営規範についての覚え書き」(『長岡京古文化論叢』) 1986
- 注6 注2中山論文
- 注7 吉本昌弘「長岡京域の条里地割について」(『長岡京』第14号 長岡京跡発掘調査研究所) 1979  
 藤田さかえ「長岡京条坊プランと条里」(『長岡京』第28号 長岡京跡発掘調査研究所) 1983  
 百瀬ちどり「長岡京条坊制小論」(『長岡京古文化論叢』) 1986
- 注8 山中氏は、宮城の設定に平城京の計画単位が影響しているとしながら、南北路で朝堂院中軸—東西一坊大路外側築垣心、東西路で一条大路路心—二条大路南面築垣心が1820尺であることから、これを一坊の長さとして京全体に採用している。しかし、南北路では、東西一坊大路の外側両側溝から朝堂院心までが正確に1800尺であること、東三坊大路・西二坊大路の路心が平城京型の計画心と一致すること、さらに東西路においても、一条大路路心から北へ1820尺折り返した位置( $x=-116,729.83$ )は、北一条大路北側溝 S D 1460202の北側に想定される築垣心( $x=-116,714.08$ )と大きくずれること(15.75m=53.2尺)等から、あえて築垣心を基点とする必要性が認められない。
- 注9 平城京の条坊制については、右記の論文に従う。井上和人「古代都城制地割再考-藤原宮・平城宮を中心として-」(『奈良国立文化財研究所学報第41冊 研究論集Ⅶ』) 1985
- 注10 以下、「尺」のみの表記は、小尺(1尺=0.296m)を示す。
- 注11 朱雀大路については、松崎俊郎氏によりいくつかの想定のうち、築地心心間で239尺、側溝心心間で203尺とする復原案が示されている(文献14)。小稿の方法によって朱雀大路の東側溝を逆算すると、 $a=-26,815.73$ となり、朱雀大路側溝間距離は51.82m(175尺)と算出できる。こ

の時、朱雀大路路心は朝堂院心から西へ1.24m(4.2尺)ずれる。なお、朝堂院心から西側溝までを折り返して計算すると、54.3m(183尺)となり、8尺の差がでる。両者の中間を取れば、側溝心間で180尺の規格が想定され、平城京と比較すれば60尺も狭い幅となる。

[文献] (略称 埋文=埋蔵文化財 教委=教育委員会 向日市報告書=向日市埋蔵文化財調査報告書 向日市セ=(財)向日市埋蔵文化財センター 京都府セ=(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

- 1 「長岡京左京四条三坊・四坊」(『昭和62年度京都市埋文調査概要』(財)京都市埋文研究所) 1991
- 2 「長岡京跡外環状線整備事業に伴う埋文発掘調査報告書昭和55年度」(財)京都市埋文研究所
- 3 「長岡京左京四条三坊・四坊」(『昭和57年度京都市埋文調査概要』(財)京都市埋文研究所) 1984
- 4 「長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 京都府セ) 1992
- 5 「長岡京跡左京第134次発掘調査概要」(『向日市報告書』第22集 向日市教委) 1988
- 6 「長岡京跡左京第196・214次発掘調査概要」(『向日市報告書』第34集 向日市教委) 1992
- 7 「長岡京跡左京第211次発掘調査概要」(『向日市報告書』第30集 向日市教委・向日市セ) 1990
- 8 『長岡京』9・10号(長岡京跡発掘調査研究所) 1978

※座標値は、左京第51次調査(『向日市報告書』第7集 1981)による。

- 9 「長岡京跡左京第120次発掘調査概要」(『向日市報告書』第18集 向日市教委) 1986
- 10 「長岡宮跡第210次発掘調査概要」(『向日市報告書』第25集 向日市教委) 1988
- 11 「左京第199次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報昭和63年度』) 1990
- 12 「長岡京跡左京第184次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第20冊 長岡京市教委) 1988
- 13 「長岡京跡左京第232次発掘調査概要」(『向日市報告書』第28集 向日市教委・向日市セ) 1990
- 14 「長岡京跡右京第161次発掘調査概要」(『向日市報告書』第17集 向日市教委) 1985
- 15 「長岡京跡右京第401次調査現地説明会資料」(長岡京市教委・(財)長岡京市埋文センター) 1992
- 16 「右京第278次調査略報」(『長岡京市埋文センター年報昭和62年度』) 1989
- 17 「長岡京跡右京第165次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第15冊 京都府セ) 1985
- 18 「長岡京跡右京第194次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊 京都府セ) 1986
- 19 「長岡京跡右京第90次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教委) 1982

※文献1～3の座標値は、長宗繁一「長岡京条坊制についての私案」(長岡京連絡協議会資料 1991.2.27)による。

※文献11の座標値は、山中 章氏作成の条坊データ一覧表による。

## 平成4年度発掘調査略報

## 18. 遠所遺跡群

所在地 竹野郡弥栄町木橋小字遠所・岩鼻谷  
 調査期間 平成4年4月13日～平成5年2月25日  
 調査面積 約40,000m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の鴨谷団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受け実施したものである。遺跡群は弥栄町の西端、網野町との町境に位置し、ニゴレ古墳(5世紀中頃)の南側の谷奥に、南北800m×東西600mの範囲に広がっている。

遠所遺跡群は、中央部に位置する遠所古墳群(5世紀末～6世紀後半)の調査が起因となって、昭和62年度から調査を実施し、大規模な生産遺跡(製鉄)とそれに伴う集落・工房跡が検出されている。検出した遺構・遺物から5世紀末～13世紀にかけて人々の活動痕跡が認められるが、特に、古墳時代後期と奈良時代後期はその痕跡が著しい。古墳時代後期では、6世紀後半に比定される日本最古級の製鉄炉、8世紀後半においては原料(砂鉄)－製鉄－精錬－鍛錬－製品までの一貫した生産体制であったことが確認されている。また、平成3年度までの膨大な出土遺物の整理中に木簡も確認され、奈良時代後半の鉄生産は、中央政府が関与していた可能性も指摘されている。

今年度調査は、昭和62年度より続いた遺跡群の最終調査年度にあたる。調査対象地となったのは、遠所古墳群北側のY地区、同南西側のJ－奥地区の2か所である。

調査概要 Y地区では丘陵斜面か



調査地位置図(1/50,000)



ら炭窯4基と柱穴群を検出した。炭窯は、小型のものど中型のものがある。いずれも、伏焼き式のもので、小型のものは2基確認した。平面形は楕円形で、直径約80cmほどのものである。中型の炭窯は、丘陵裾部より検出したもので、等高線に直交するものと並行するものがある。等高線に並行するものの現存長5.5m・幅2.5mの規模を有する。

柱穴群は、丘陵斜面から数多く検出したが、これらは柵列、建物跡になるような規則性はなく、伐採した木材や薪材の固定用柱穴とも考えられる。

J-奥地区では、炭窯4基と、炭窯は確認されなかったがその残骸と考えられる焼土痕多数、柱穴群を検出した。

小型の炭窯は1基検出した。平面形は方形を呈し残存状況がよいもので、長軸1.1m・短軸0.8m・深さ0.8mを測る。炭窯の周囲からは1間～2間間隔で柱穴が四隅から確認されるため、炭窯を保護した覆屋程度のもので存在していた可能性がある。

中型の炭窯は、等高線に直交するもの1基と、並行するもの2基がある。並行するものは残存状況が悪く、直交するものについては、長軸5.1m・短軸2.4mを測り、焚口に近づくほど窯体幅が狭くなる。床面傾斜があり、形態から登り窯状炭窯の小型化したものとみることできる。柱穴群については、Y地区同様のものと考えられる。

まとめ 長期にわたる遺跡群の調査を実施したが、遺構の分布状況をみると、谷が深い場合は、その最深部に至るまで遺構は認められるが、その密度が最も高いのは、谷中央部より入口付近にかけてである。調査地全体を通じて遺構のありかたをみると、古墳時代、奈良時代においては密集する傾向があるが、その他の時期のものについては、散発的でありまとまりが認められない。隣接する東側では、平成4年度より調査が実施されているニゴレ遺跡群で、遠所遺跡群では存在しなかった時期の製鉄炉・集落が確認されており、その関係が注目される。

丹後地域には古代に製鉄を行っていたという史料や伝承も残っていないが、遠所遺跡群の調査が発端となり、丹後(特に丹後半島中央部)には多くの製鉄遺跡が存在することが明らかとなってきた。現在までのところ、製鉄遺跡・製鉄関連遺跡は丹後半島及びその基部で約42か所確認されている。

丹後には古くは、扇谷遺跡で知られるように早くから鍛冶生産が開始されたところでもあり、そのような土壌の中で国内で鉄生産が開始されると、それを受け入れられる要素がすでに形成されていたとも考えられ、日本での鉄生産の開始時期を考える上で重要な地域ともいえる。また、出土木簡に見られるように、丹後の製鉄は中央政府とどのように位置づけられていたのか、その関係も今後考える必要がある。

(増田孝彦)

## 19. 桐谷古墳群・ニゴレ遺跡

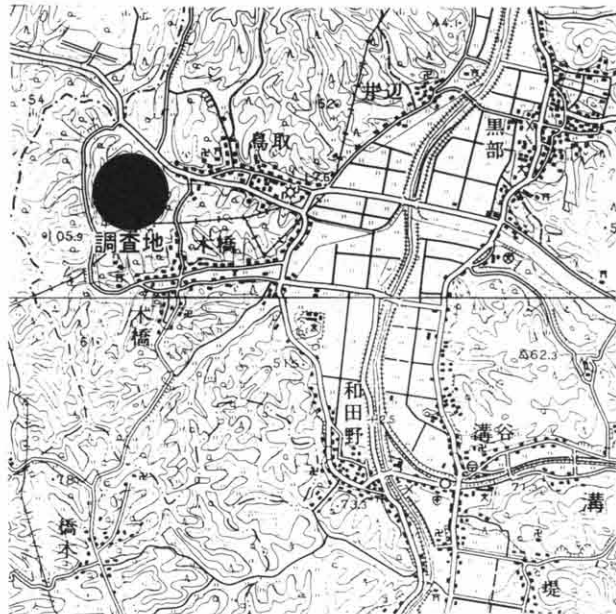
所在地 竹野郡弥栄町鳥取・木橋  
 調査期間 平成4年9月24日～平成5年2月26日  
 調査面積 約7,300m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、京都府農林水産部が計画・推進している「丹後あじわいの郷」の造成工事に先立ち、造成に係る遺跡のうち、今回は二遺跡の調査について、同局の依頼を受けて実施したものである。

桐谷古墳群は、発掘調査に先立ち、京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が合同で実施した分布調査で発見した遺跡で、15か所の古墳状隆起と2基の古墳からなる。この内古墳2基については、『京都府遺跡地図』に鳥取14・15号墳として記載されているが、周知の遺跡と新たな遺跡の分布状況から桐谷1・2号墳と改名したものである。したがって、以後鳥取古墳群は、総数13基となる。また、ニゴレ遺跡は、造成予定地内の丘陵斜面から谷部にかけてが範囲である。分布調査時には、谷部から土器片の散布を丘陵裾部の1か所から鉄滓や炭の堆積を確認している。採集遺物から、時期を判断できるものはなかったが、多量の鉄滓の発見は製鉄炉をうかがわせ、この付近には製鉄関連遺構が存在すると考えられた。

調査概要 桐谷古墳群は、造成にかかる11か所の古墳状隆起の試掘調査と、桐谷1・2号墳の発掘調査を行った。また、並行してニゴレ遺跡の試掘調査も実施した。

桐谷古墳群 1号墳は、低丘陵先端にあって、径約15m・高さ約2mを測る。



調査地位置図(1/50,000)

墳丘からは、南北方向の主体部2基を確認した。木棺直葬と小口石をもつものであった。主体部からの遺物はなく、時期は不明である。2号墳は、1号墳の南西側に隣接していた。径約10m・高さ約2mの墳丘から主体部1基を確認した。この主体部からも遺物は出土していない。また、11か所の古墳状隆起については、試掘調査の結果、古墳ではないことが判明した。

**ニゴレ遺跡** 住居跡・炭窯・製鉄炉など計約40基を確認した。一部の住居跡からは、少量の鉄滓と7世紀初頭の土器が出土しており、付近からは、平面形が径1m前後の小型の炭窯や、4m×2mを測る炭窯が、十数基築かれていた。これらの調査成果にあわせて、谷奥の丘陵裾部での製鉄炉発見は、この遺跡が製鉄遺跡であることを決定付けた。

製鉄炉については、炉近くから9世紀後半の土器が出土したことにより、少なくともこの時期には、製鉄の作業がなされていたことが明らかとなった。また、住居跡内から7世紀初頭の土器に混じっての鉄滓出土は、この時期の製鉄炉の存在も考えられる。これについては、分布調査時に確認している、鉄滓・炭が厚く堆積しているところに製鉄炉がある可能性があり、今後の調査成果に委ねるところである。

**まとめ** 桐谷古墳群総数17基のうち、丘陵尾根筋の最高位の4基を除いた古墳と古墳状隆起の調査を行った。このうち、古墳とわかったものは、低丘陵端に位置する2基で、かなり奥まったところに築かれており、その眺望はきわめて悪い。唯一「丹後あじわいの郷」造成予定地北側の田畑部を望むことができる。現在の府道網野岩滝線沿いである。ここは、土器散布地で、土器から時期を判断できなかった。このように古墳との地理的な条件から考えると、土器散布地には、古墳時代の何らかの遺構が存在するものと推定される。

また、ニゴレ遺跡については、製鉄関連遺構の検出により、隣接する遠所遺跡群と同一遺跡と見る方が妥当であると考えられる。6世紀後半と8世紀後半に鉄を生産していた遠所遺跡群に対して、ニゴレ遺跡では7世紀初頭と9世紀後半に鉄生産を行っていたようである。このことから、この地域では6世紀後半から9世紀後半にかけて約300年間連続と移動しながら製鉄を行っていたと考えられる。移動の原因については、製鉄に多量に必要となる炭の原材料である樹木を求めてのことと考えられるが、現在調査途中であるため、詳細については今後の調査成果に委ねるところである。

(岡崎研一)

## 20. 神宮谷古墳群

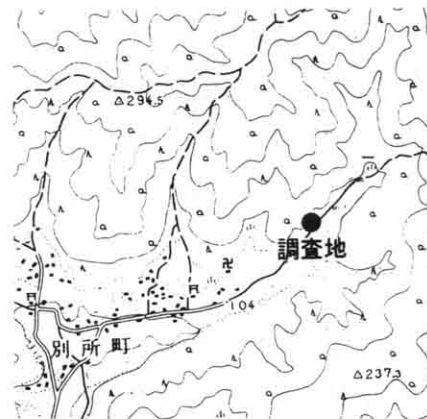
所在地 綾部市別所町神宮谷  
 調査期間 平成4年10月21日～平成5年3月5日  
 調査面積 約500㎡

はじめに 神宮谷古墳群は由良川支流である犀川の最上流域に位置する。古墳群は4基の横穴式石室墳からなり、その立地は谷部の奥にある南側の丘陵部に立地する。今回の調査は、3号墳の本調査と、3号墳調査中に発見された4号墳の試掘調査を行った。この調査は京都縦貫道の建設に先立ち、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。

調査概要 神宮谷3号墳は、直径約12m(推定)・高さ約0.8m(現存高)の規模をもつ。墳形は後世の削平により、約1/4しか残存していない。墳形は、円墳と推定される。外表施設には墳丘の上段にめぐる外護列石がある。埋葬施設は両袖の横穴式石室である。石室の規模は全長6.4m・玄室長3.6m・玄室幅1.8m・羨道長2.8m・羨道幅1.3mを測る。この石室は奥壁・側壁とも基底石に巨石を用い、その上に60～80cm大の石を横積みする。中でも袖石に使用された巨石が最大である。床面には敷石を設ける。また、この石室の玄室内には高さ1mの壁が奥壁の中央から袖石に取りつくように築く。そしてこの壁と奥壁・西側壁を利用することにより、第2次埋葬施設を形成する。この第2次埋葬施設は、玄室幅0.8m・玄室長3.6mを測る。玄室床面には敷石と区画列石を設けて、埋葬空間を区画する。

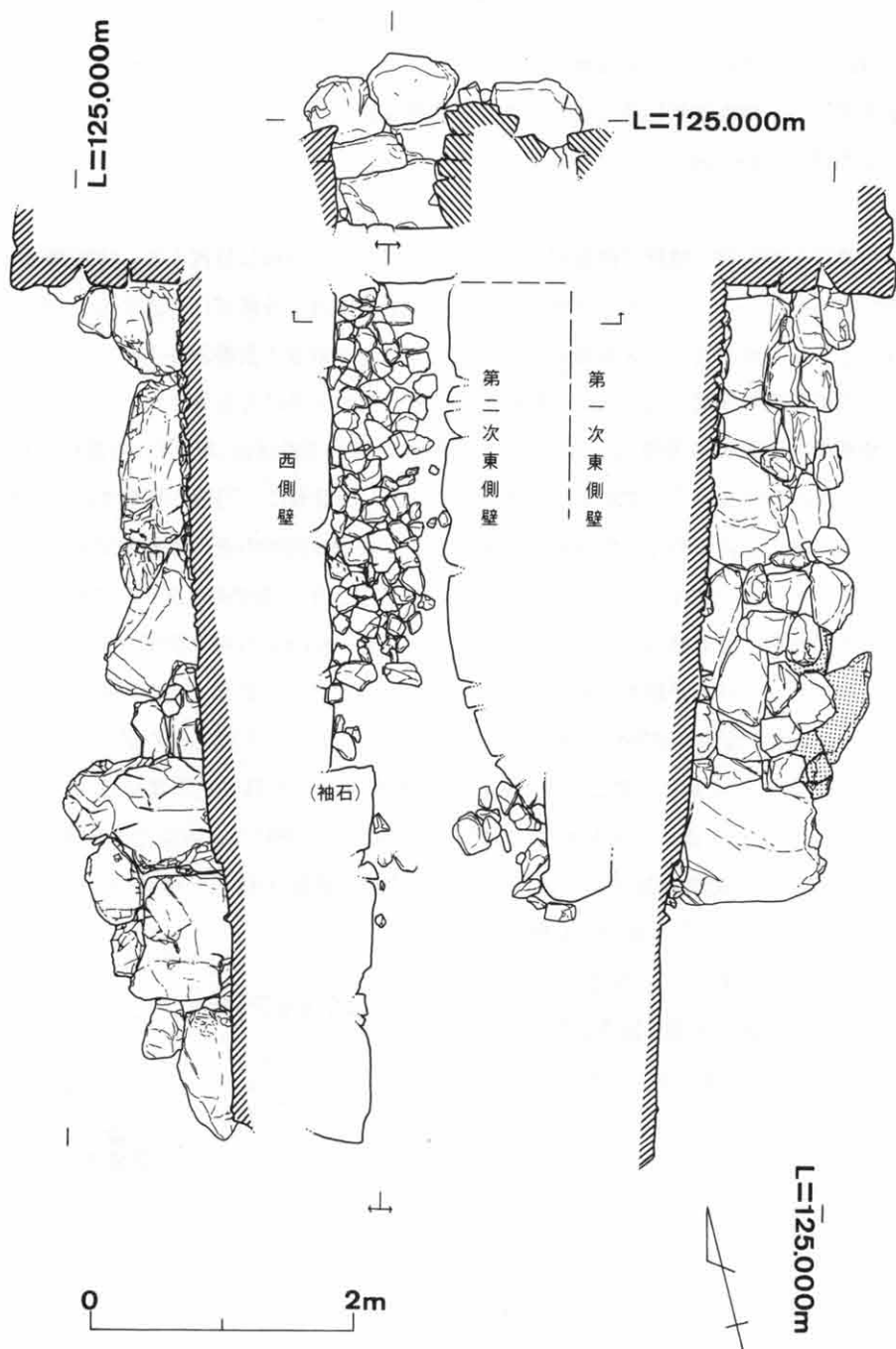
出土遺物は第2次埋葬施設の玄室床面から須恵器・鉄鏃・鉄刀・馬具(鐙・轡・飾金具・しおで)、埋土中から鉄刀・金環、羨道床面から須恵器(杯蓋)・土師器(杯身)・鉄鏃・馬具(鐙)、第1次埋葬施設からは須恵器(杯蓋)・鉄斧等、墳丘流土中からは須恵器(甕・杯蓋)等が出土している。出土した須恵器は6世紀後半～末頃のものである(詳細な時期は現在整理中であり、今後確定したい)。

この第2次埋葬施設のように玄室の一方に壁を構築し、埋葬空間を設けているものは他に類例をみない。ただ横穴式石室の玄室内に



第1図 調査地位置図(1/25,000)

小石室を造っているものとしては京都市下西代2号墳がある。この神宮谷3号墳の第2次埋葬施設の存在は横穴式石室の構築の契機、目的、追葬等で多くの問題点を提供した。今後の参考資料の増加が望まれる。(岸岡貴英)



第2図 3号墳石室実測図



第2図 3号墳全景(南から)



第3図 3号墳横穴式石室(北から)

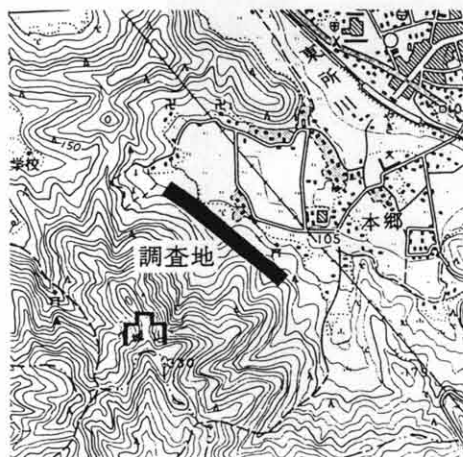
## 21. 八木城跡 第 2 次

所在地 船井郡八木町本郷  
 調査期間 平成4年5月18日～平成5年3月5日  
 調査面積 約4,000m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、国道9号バイパス(京都縦貫自動車道)建設に伴うもので、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。調査地は、八木町南部の亀岡市との境界にある城山(八木城の山城跡)の北東部分である。この部分には、人工的に造成されたと考えられる平坦地が散在し、八木城に関連する遺跡と想定されていたところである。昨年度の試掘調査(第1次調査)でも八木城に関係すると考えられる遺構・遺物を検出しており、今回は追加試掘調査及び本調査を実施した。

調査概要 今回の調査では、武家屋敷と考えられる屋敷地跡や丘陵部を段々状に造成した曲輪跡などを検出した。

屋敷地跡は、山城側に石垣をめぐらし、その一角に方形石組遺構や円形石組井戸をもつ。方形石組遺構は、約2.4m×1.8m・深さ約1mで、底部付近から木製盆や桶の一部などが出土した。池または水を溜める施設と考えられる。円形石組井戸は、石組がかなり崩れている。底部に丸太材を「井」字形に置いて胴木とし、その上に石を組み上げる。このほか、地下式貯蔵穴と考えられる土坑2基なども検出した。建物の礎石と考えられる石が数個残



第1図 調査地位置図(1/25,000)

存していたが、具体的な建物の規模や棟数などは不明である。なお、石垣は、4回または5回にわたり造り替えられている。この屋敷地跡から16世紀頃の土師皿・瀬戸美濃系陶器・丹波焼播鉢・中国製輸入磁器などが出土した。

曲輪跡は2か所で検出した。そのうちの1か所は、城山裾に張り出した丘陵の先端部にあたる。ここでは、丘陵の背や腹を岩盤まで削り込んで造成した段々状の平坦地を検出した。隅櫓の土台と考えられる石垣の一部や、建物の礎石とみられる石などが残存する。礎

石とみられる石のなかには、宝篋印塔の基礎を転用したものもある。この曲輪跡からは、土師皿や中国製輸入磁器などのほか、「梅田社」の刻銘がある鰐口と考えられる銅製品の破片が出土した。もう1か所は、丘陵裾部の狭い谷部を埋めて段々状に造成した平坦地を検出した。建物跡などは確認できなかった。土師皿が多数出土した。

小 結 八木城跡は、室町時代の丹波守護代内藤氏の居城として、京都府の山城跡のなかでも著名なものである。また、キリシタン武将内藤ジョアンに関係する城跡としても知られている。しかし、八木城の存続期間や城主の系譜などについてはさまざまな説があり、よく知られているわりには不明なところも多い城跡である。ことに城下のようなについては、全くわかっていない状況である。

今回の調査成果の一つは、城下の状況の一端を確認できたことである。屋敷地跡付近は、古絵図に「天神口」と記されている部分にあたり、八木城の大手ともいわれている。いずれにしても、八木城の重要な入り口の一つと考えられる。今回検出した屋敷地跡の居住者は不明であるが、立地からみて有力武士の屋敷地とも考えられる。また城山裾部の曲輪群は、重要な入り口を守る八木城最先端の防御拠点と考えられる。今回の調査は、京都府内では数少ない山城の城下部分の調査として注目される。(引原茂治)



第2図 屋敷地跡主要遺構(北東から)



## 22. 植物園北遺跡

**所在地** 京都市左京区下鴨半木町  
**調査期間** 平成4年9月22日～平成5年2月10日  
**調査面積** 約920m<sup>2</sup>

はじめに 今回の発掘調査は、「陶板名画の庭(仮称)」建設に伴い京都府総合府民部の依頼を受けて実施したものである。調査地は府立総合資料館の西隣りに位置し、植物園北遺跡としては第11次調査となった。縄文時代晩期～安土・桃山時代にかけての集落跡である植物園北遺跡は、京都盆地北辺部の賀茂川左岸の扇状地に位置し、遺跡範囲として周知された総面積はおよそ140haにもなる。

**調査概要** 当初、調査対象地内でトレンチによる試掘調査を実施した後、比較的攪乱が少なく柱穴等の遺構の検出をみた北部域で面掘による本調査を行った。調査によって判明した旧地形は現況と大きく異なり、調査地中央以北が南部に対して微高地(比高差90cm)となることが明らかになった。本調査で検出した主要な遺構は、建物跡1棟・柱穴・土坑・流路などである。建物跡を含む遺構の多くは北部の微高地上に分布が集中し、南部域ではいくつかの土坑・柱穴が存在する程度である。建物跡はほぼ真北方向の軸線をもつ総柱の掘立柱建物跡であり、2間×2間(4.6m×4.9m)の規模を測る。また、調査地中央部には、微高地の裾に沿って東流する幅約11mの浅い溝が存在し、上層から布留式併行期(古墳時代前期)の甕・高杯等の出土をみている。

まとめ 今回の調査では多くの遺構の検出をみたが、溝跡以外に遺物が伴わず、建物



調査地位置図(1/50,000)

跡・土坑等の時代判定ができないままに終わった。出土遺物はわずかに整理コンテナ3箱であったが、弥生時代中期～平安時代の土器が出土した。調査地周辺では、過去の調査で古墳時代後期～平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡が多数検出された。今後、府立総合資料館周辺部での調査が進めば、植物園北遺跡南部域の様相が明らかになると期待される。(竹原一彦)

## 23. 名神高速道路関係遺跡

所在地	①乙訓郡大山崎町円明寺ほか(大山崎工区) ②乙訓郡大山崎町下植野(下植野工区) ③京都市南区東土川町長丸・伏見区久我本町三ノ坪(京都工区)
調査期間	平成4年4月8日～平成5年3月24日
調査面積	①約1,970m <sup>2</sup> (大山崎工区) ②約8,250m <sup>2</sup> (下植野工区) ③約1,890m <sup>2</sup> (京都工区)

はじめに この調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局から依頼を受けて実施している。調査は昭和63年度から開始し、今年で5年目になる。

平成4年度の調査は、大山崎・下植野・京都の3工区で約12,110m<sup>2</sup>の調査を行った。大山崎工区では、3地点で調査を行い、古墳時代から中世・近世にかけての各時代の遺構遺物を検出した。下植野工区では、7地点で調査を行い、縄文時代晩期から中世・近世にかけての遺構遺物を検出した。また、京都工区での調査は今年度から開始し、3地点で調査を行っている。以下では、各工区別に検出した遺構のうち主なものについて報告したい。

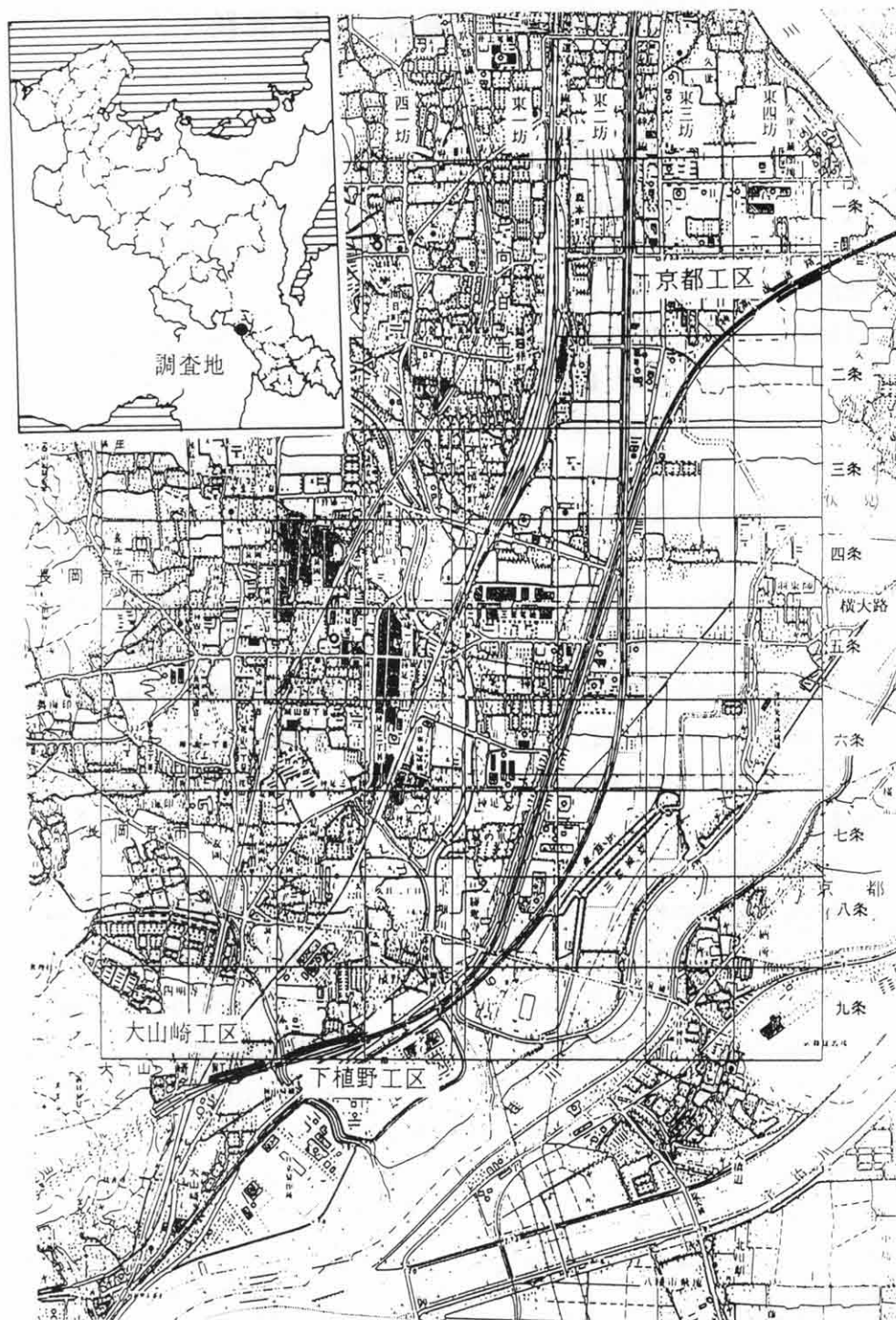
### 調査概要

#### ①大山崎工区

**古墳時代** 調査地の東端で、竪穴式住居跡2棟と土坑2基、旧河道跡を検出した。竪穴式住居跡はいずれも保存状態がよく、住居跡に取り付く竈の構造がよくわかるものであった。竪穴式住居跡は方形を呈し、竈は、北東の辺中央部付近に取り付くものと、北西の辺中央部に取り付くものがあり、竈内及びその周辺からは土師器の甕が出土した。また、検出した竪穴式住居跡のうち1棟では、煙道と考えられる溝と焼土を検出した。竪穴式住居跡の横で検出した土坑内からは土師器の甕が2个体出土している。

**平安・中世** 調査地の西寄りを南北に走る西国街道の両側で各時代の宅地の配置がわかる井戸や掘立柱建物跡を検出した。

また、西国街道の東側では、9世紀後半から10世紀前半に埋没した旧西国街道(古山陽道)の路面と側溝を検出した。ここでは古山陽道が西側に作り替えられていくことが確認できた。さらに下層では奈良時代の土器を出土する落ち込みを検出した。



調査地位置図(平城京型で復原)

## ②下植野工区

推定長岡京跡の最南端に当たり、下植野南遺跡・松田遺跡(縄文時代から古墳時代)の範囲にも入っている。

**縄文時代** 調査地の東寄り、2基の土壌に埋められた縄文時代晩期の凸帯文土器3個体を検出した。

**弥生時代** 調査地の西端で畿内第2様式期の溝及び土壌を、調査地の中央部で畿内第3・4様式期の土壌を検出した。

**古墳時代** 現在までの調査で前期の布留・庄内期の竪穴式住居跡1棟を含む竪穴式住居跡群を調査地の全域から25~26基、古墳時代と考えられる掘立柱建物跡を調査地の東寄りで14~15棟検出し、調査地の東端で小型の方墳を3基検出した。これらの調査結果により、下植野南遺跡全域に古墳時代の集落が広がっていることを確認した。

**長岡京期** 可能性のあるものとして、調査地の中央で掘立柱建物跡2棟と土坑を検出した。これらの遺構は、推定長岡京内で見つかった長岡京期の最も南の遺構となる。近年問題になっている長岡京の条坊を二町あげる説をとると、京外に位置し、都城周辺の宅地利用を考える上で重要な遺構となる。ちなみに、名神関連遺跡のうち、大山崎・下植野工区の調査では、条坊関連遺構は全く検出されていない。

**平安時代** 調査地の中央で長岡京期の可能性のあるものを含め掘立柱建物跡8棟、井戸1基を検出した。これらの時期は、9世紀後半から10世紀前半のもので、当地の東を斜行する久我堰(平安京期の山陽道)が機能している時期のものと考えられる。

**中・近世** 中世のものとしては調査地の東寄りで検出した掘立柱建物跡1棟があるのみで、宅地化された土地利用はあまり認められない。近世には、農耕用の野井戸が掘られており、農耕に土地利用されていたようである。

## ③京都工区

調査は本年度から開始した。当調査地は京都市伏見区久我本町の名神高速道路沿いである。長岡京の条坊復原によれば、左京南一条四坊にあたり、南北道路では東四坊第二小路と東四坊大路、東西道路では南一条条間大路などの条坊が想定される地点である。年度末までに各調査トレンチでは、中世までの水田耕作に関わる溝群を確認しており、一部で東四坊第二小路の側溝や長岡京期と考えられる掘立柱建物跡などを検出している。

(戸原和人)

## 24. 荒 坂 遺 跡

**所在地** 八幡市美濃山荒坂・御毛通  
**調査期間** 平成4年10月12日～平成5年3月8日  
**調査面積** 約2,700m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、京阪間の慢性的な交通渋滞を緩和するべく計画された幹線道路（京都南道路）の建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したものである。荒坂遺跡は、京都・大阪両府境にほど近い丘陵（男山・甘南備丘陵）尾根上に立地し、若干の土器・石器（旧石器）資料が採取されたことにより近年遺跡として登録されたものである。このため、過去に発掘調査例がなく、その実態は不明であったが、周辺の遺跡密度の高さや、良好な人文的環境などから、それ相応の成果が期待された。

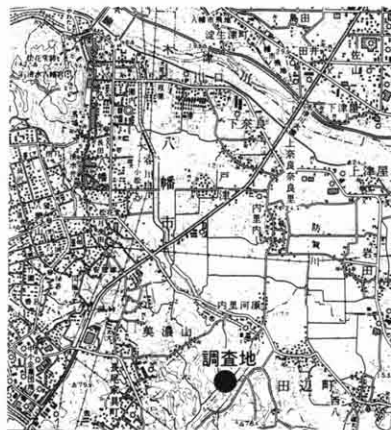
**調査概要** 調査地は、尾根筋を縦走する林道を挟んで東側（A地区）が土入れ等により起伏の激しい竹藪、西側（B地区）が平坦な耕地となっている。その地形の差は大きいものの、両地区に遺構の拡がりが見られた。検出遺構の概略を以下に記す。

**古墳** A地区で検出された一辺20m前後の方墳である。竹藪の土取りにより、北東側約1/2を失う。厚さ1mにわたる土入れ層（客土）に被覆され遺存していた南西側も、墳丘部分は相当に削平されており、内部主体は痕跡すら残さない。墳丘主軸は南北軸に対し約45°の交角で斜交するが、これは尾根筋の軸線に一致する。周濠は、現状では幅4.0m・深さ約0.5mを測り、横断面を逆台形状に掘り込んでいる。また、北西コーナー部に陸橋状の施設がある。

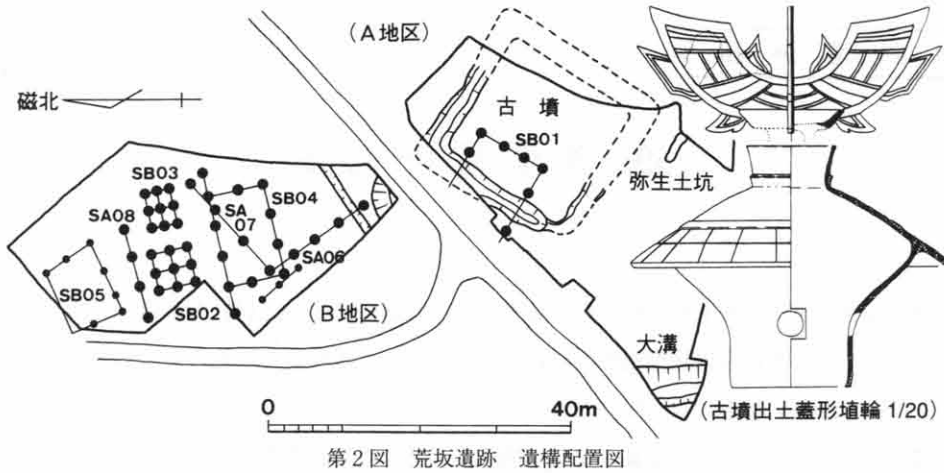
外部施設として、周濠内各所から埴輪類が出土したことから埴輪の圍繞が想定できる。葺石はない。

周濠内遺物のなかには、ほぼ全景をうかがうことのできる蓋形埴輪や遺存状態のよい土師器甕などがあり、注目される。これらの遺物から4世紀末～5世紀初頭の築造とみてよい。

**掘立柱遺構** A・B両地区で検出された。複数の建物と柵列に復原できる（付表参照）。いずれも、柱掘形が大規模で、柱間寸法を広くとることを特徴と



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 荒坂遺跡 遺構配置図

する。主軸方位を基準に、磁北に対して13~25°西に振る一群(a群)と、方位にa群ほどの厳密性はないものの、北に対して大きく東に振る一群(b群)に分離できる。両者は、一部重複関係にあるが、a群が北に、b群が南寄りに占地する傾向がある。造営時期に関しては、掘形内の遺物が皆無(一部埴輪片が出土したものがあるが、これは古手の混入である)であることから決め手を欠くが、柱穴規模やその平面形態、建物形式、あるいはその配置などに高い規格性が認められることなどから、古代にさかのぼる可能性は充分考えられる。

その他の遺構 このほか、弥生時代後期の広口壺1個体が底面に据え置かれるようにして出土した長方形土坑(土壙墓?)や、TK216形式の須恵器甕を投棄したピット状遺構・幅約5mの「U」字形断面を呈する溝状遺構(大溝)などが検出された。

まとめ 今回の成果のうち、主だった点をまとめると、①古墳から出土した蓋形埴輪は、その初源形態とされる佐紀陵山古墳例の諸要素を多分に残し、これに後続するとされる津堂城山古墳例に形式的に先行する資料といえる。②掘立柱遺構群は、官衙の様相を示し、「御毛通」の地名などから、郷(・里)家(サトノヤケ)の可能性を考えるのも一案であろう。

(伊賀高弘)

付表 掘立柱遺構一覧表

遺構名	建物形式	主 軸	桁行柱間	梁行柱間	掘 形
S B 01	2間以上×3間	N30° E	3.9~6.0m	3.0~3.6m	方1.2~1.8m
S B 02	2間×2間(総柱)	N13° 30' W	2.6m等間	2.4m等間	方1.0~1.9m
S B 03	2間×2間(総柱)	N13° 30' W	2.4m等間	1.8m等間	方1.0~2.0m
S B 04	3間×2間	N13° 30' W	3.8m等間	3.6m平均	方1.0~1.4m
S B 05	3間×2間以上	N25° W	2.4~4.0m	2.9~4.5m	方0.7~1.0m
S A 06	4間分	N35° W	3.7m等間		方1.0~1.8m
S A 07	3間分	N47° E	4.8~5.8m		方1.0~1.8m
S A 08	3間分	N75° E	4.1・3.6m		方1.0~1.8m

府内遺跡紹介

59. 豊楽院正殿跡

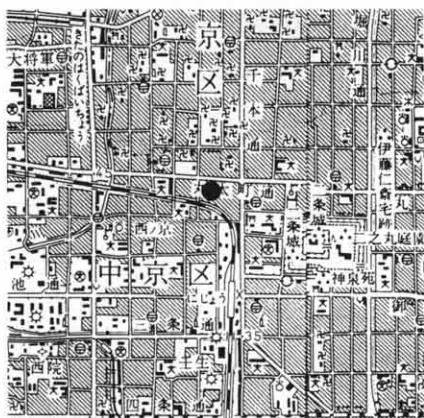
豊楽院正殿跡は、豊楽殿と称される殿舎で、平安宮(平安京大内裏)内に存在した。場所は、現在の京都市中京区聚楽廻西町85に位置している。現在は市街地になっているが、周辺よりは一段高い地形になっていた。

豊楽院は、平安宮の公的な宴会を行う場所として、平安京遷都とともに造営が計画され、建物が建てられたもので、平城京の第一次朝堂院をその前身に宛てる説や、全く新たに平安京遷都に伴って成立した施設とする見解もある。現在までのところ、豊楽院を取り扱った研究はごくわずかであり、儀式や儀礼との関連で今後この分野の研究が進んでいくことと思われる。そのような状況ではあるが、橋本義則氏がこの分野ではすぐれた研究を発表されている。

橋本氏の研究は、要約すると、次の諸点にまとめられる。①豊楽院は正月七日の白馬節会を行う場として建設され、嵯峨朝の儀式整備計画の中で元日節会や十六日踏歌節会、十七日大射にも用いられるようになった。②豊楽院は大嘗祭や新嘗祭の豊明節会の場としても用いられるように計画されていたが、新嘗祭では内裏が利用されるようになった。③平城宮で天皇が大極殿に出御して行われる儀式は、平安宮でも朝堂院で行われたが、平城宮で天皇が閤門に出御して行われる宴会や授位などは豊楽院で行われるようになった。

以上の研究は、豊楽院を包括的に扱い、儀式の中でその役割を考えた点で高く評価すべきものである。このように、豊楽院では国家的な儀式や宴会を行う場として平安京遷都に際して設けられたとする意見が次第に有力になってきている。

豊楽院の正殿を豊楽殿といい、諸儀式の時にはここには天皇が出御し、高御座も置かれる。この高御座が置かれ、そこに天皇が出御する点が平城宮の場合と大きく異なっている。さらに、朝堂院と大きく異なる点は、宮中御齋会こさかいえや齋王発遣儀礼など若干の例外はあ

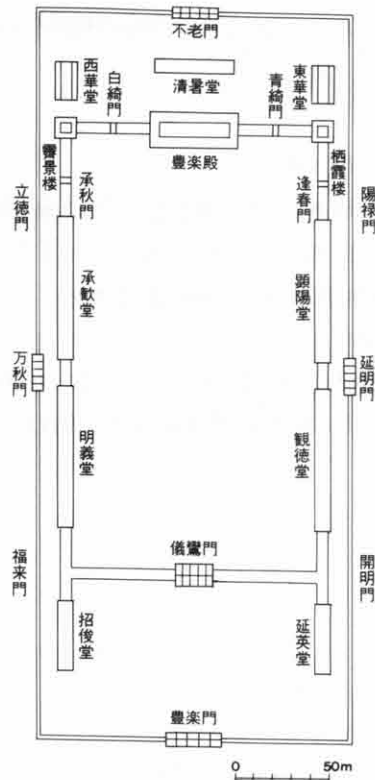


第1図 遺跡所在地(1/50,000)

るものの、その他の儀式には原則的には朝堂院の正殿である大極殿には基本的には天皇・皇后及び侍従クラスの人しか上がれないのに対して、豊楽院においては皇太子・親王・参議以上も豊楽殿内に着座するのである。このことは豊楽院が宴会などの国家的儀式を行う場としての性格によるだけでなく、橋本氏が指摘されたように、かつての平城宮における閣門出御の儀式の系譜を引いているからとみたほうがよからう。

このように、平安京遷都とともに国家的儀式を行う場として設けられ、儀式が整備される嵯峨朝を経て、その役割が増大した。9世紀は儀式が整備される時期であり、大嘗祭でも第二日目の辰日の節会、第三日目の巳日の節会の両方が豊楽院で挙行されている。これらの節会は、一種の宴会ではあっても、大嘗祭の一連の儀式であり、これも祭祀行為の一環として捉えうるものであることが岡田精司氏の一連の研究によって明らかになっている。このうち、巳日の節会には、豊楽殿の後方にある清暑堂において神楽が行われる。清暑堂神楽は、松前 健氏の研究によって、『日本三代実録』貞観元(859)年11月17日条に「是夜。天皇留御豊楽殿後房。文武百官侍宿。親王已下参議已上侍御在所。琴歌神宴。終夜歡樂。賜御衣。」とあるのが初見とされている。松前氏の指摘のように、大嘗祭における豊明節会が儀式化され、一連の行事となったため、本当の意味での宴会が必要となり、この清暑堂神楽が演じられるような宴会が設定されるようになったのであろう。

豊楽院での国家的行事は、10世紀以降次第に衰退していったらしい。特に、『扶桑略記』によれば、康平6(1063)年に豊楽殿が焼亡したことがわかり、これ以後どうも正殿である豊楽殿は再建されなかったらしい。清暑堂神楽もこれ以後もっぱら内侍所で行われるようになったが、名称だけは清暑堂神楽の名が用いられていた。また、豊楽殿をはじめ、平安宮内の多くの殿舎が焼失してしまい、再建されなくなると、行事の中心は元の内裏正殿、すなわち、紫宸殿の方に重点が移るようになったのである。『年中行事絵巻』などでは、かつての殿舎のあったところにテントのようなものを建てて、それをかつての殿舎にみたくて儀式を



第2図 豊楽院復原図  
(『國史大辭典』原図をもとに省略・修正)



執行しているものもみえるが、豊楽殿における儀式の中にもそのようなものもあったかもしれない。

豊楽院全体の発掘調査はまだなされていないが、豊楽殿については、1976年の立会調査と1988年に発掘調査が実施され、豊楽殿の北縁及び西縁と清暑堂とつながる北廊が検出されている。その結果、豊楽殿の建物は桁行9間、梁間4間で、4面廂のつくことが明らかになった。豊楽殿の基壇は、北面中央階段から西階段にかけて凝灰岩の切り石が残存していたことから、壇上積み基壇であることがわかった。さらに、現存の陽明文庫に残されている『大内裏図』（鎌倉時代）では、豊楽殿と清暑堂とは北廊という廊下で結ばれているが、調査の結果、これは当初からではなく、北面中央階段をいったん取り壊した後で新たに造ったことが証明された。この時期については、調査担当者は9世紀前半に極めて近い時期と推定しており、そうすると、完成後間もない時期に北廊が取り付けられたことになろう。あるいは、嵯峨朝における儀式整備計画と関連するのかもしれない。

豊楽殿の北半分については、このようによくわかるようになってきており、豊楽院の中軸ラインも判明したが、その他の豊楽院内の殿舎については、いまだ発掘調査で明確にはなっていない。今後の調査の進展でわかるようになることを期待したい。

(土橋 誠)

<参考文献>

裏松固禪『大内裏図考証』（『新訂増補故実叢書』26 明治図書）

松前 健「内侍所神楽の成立」（同『古代伝承と宮廷祭祀』 塙書房） 1974

橋本義則「平安宮草創期の豊楽院」（岸 俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』中 塙書房） 1984

岡田精司『古代祭祀の史的研究』 塙書房 1992

『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989

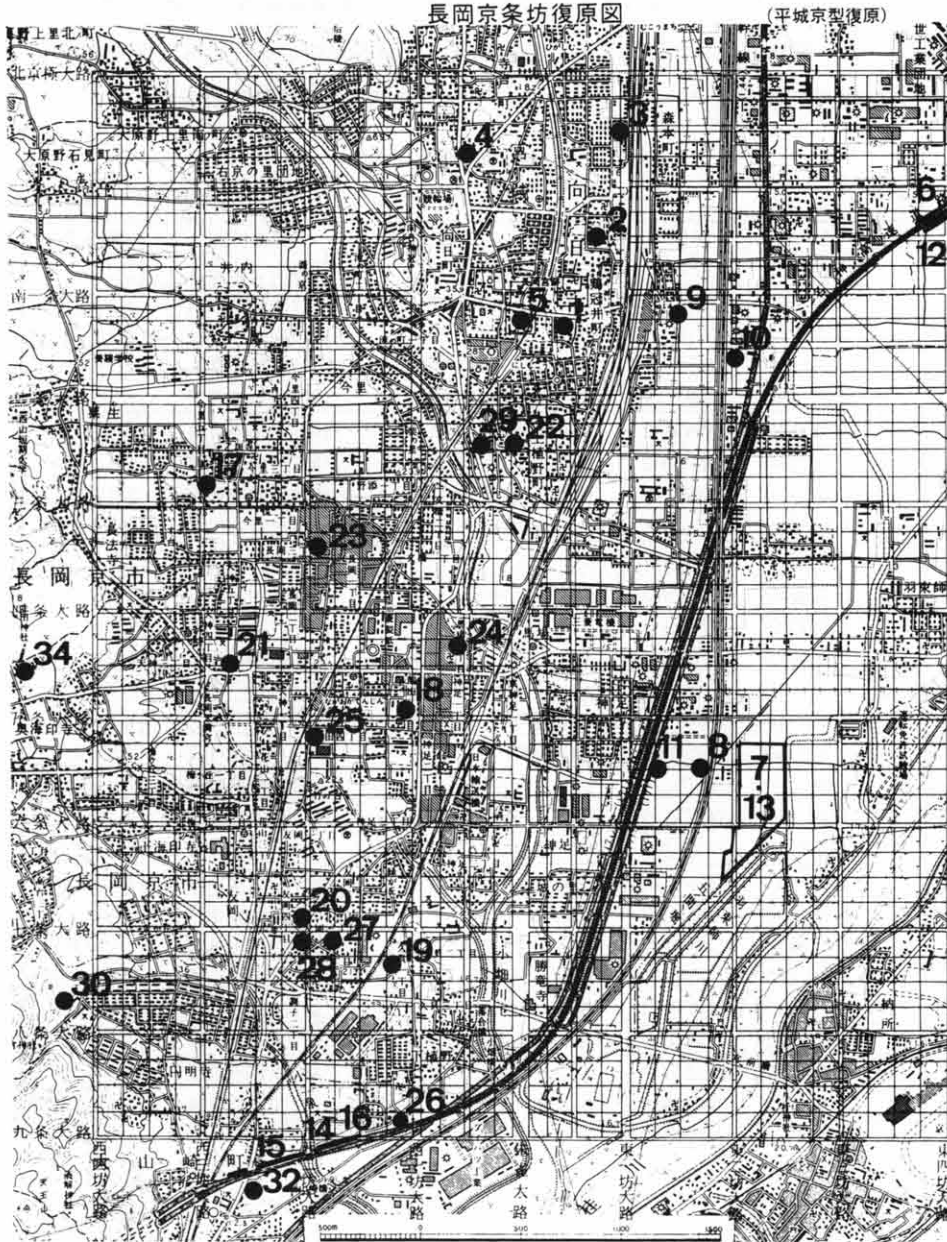
## 長岡京跡調査だより・45

平成5年2月24日・3月24日・4月27日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮内5件、左京域8件、右京域17件、京外その他5件の計35件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

## 調査地一覧表

(1993年4月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内275次	7AN9Y	向日市鶏冠井町山畑	(財)向日市埋文	1/22~3/2
2	宮内276次	7AN3F-2	向日市森本町藪路	(財)向日市埋文	3/1~3/31
3	宮内277次	7AN1F	向日市森本町上森本	(財)向日市埋文	3/10~3/31
4	宮内278次	7ANBNC	向日市寺戸町南垣内	(財)向日市埋文	4/1~
5	宮内279次	7ANEYT-1	向日市鶏冠井町山畑	(財)向日市埋文	4/12~4/17
6	左京286次	7ANWSA-2	京都市伏見区久我本町	(財)京都府埋文	4/7~
7	左京288次	7ANMND-2	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
8	左京297次	7ANMJN-2	長岡京市神足拾貳11	(財)長岡京市埋文	2/17~
9	左京300次	7ANEMD-1	向日市鶏冠井町門戸	(財)向日市埋文	2/9~2/27
10	左京301次	7ANESH-10	向日市鶏冠井町沢ノ東	(財)向日市埋文	4/1~
11	左京302次	7ANMJN-3	長岡京市神足拾貳1	(財)長岡京市埋文	4/21~
12	左京303次	7ANVKN	京都市南区東土川町	(財)京都府埋文	4/7~
13	左京306次	7ANYOB-1	京都市伏見区淀橋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
14	右京368次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8~2/26
15	右京394次	7ANSIR	大山崎町円明寺井尻	(財)京都府埋文	1/8~2/25
16	右京395次	7ANSID-4	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	7/6~3/5
17	右京417次	7ANINC-5	長岡京市今里西ノ口	(財)長岡京市埋文	1/11~2/16
18	右京418次	7ANKST-5	長岡京市開田二丁目	(財)長岡京市埋文	1/18~2/26
19	右京419次	7ANROZ-2	長岡京市久貝一丁目	(財)長岡京市埋文	2/1~2/26
20	右京420次	7ANNMC-3	長岡京市友岡四丁目	(財)長岡京市埋文	3/15~4/14
21	右京421次	7ANKNC-2	長岡京市天神四丁目	(財)長岡京市埋文	2/8~2/26
22	右京422次	7ANFMZ-3	向日市上植野町西小路	(財)向日市埋文	2/1~3/12
23	右京424次	7ANIKE-4	長岡京市長岡三丁目	(財)長岡京市埋文	2/15~3/11
24	右京425次	7ANLTR-3	長岡京市馬場一丁目	(財)長岡京市埋文	3/2~4/10
25	右京427次	7ANKID-3	長岡京市開田四丁目	(財)長岡京市埋文	3/15~4/16
26	右京428次	7ANTGT-5	大山崎町下植野五条本	(財)京都府埋文	4/8~
27	右京429次	7ANROW-2	長岡京市調子一丁目	(財)長岡京市埋文	4/7~4/17
28	右京430次	7ANNKG-4	長岡京市友岡三丁目	(財)長岡京市埋文	4/26~
29	右京431次	7ANFKK-2	向日市上植野町切ノ口	(財)向日市埋文	4/6~
30	右京432次	7ANSTE-12	大山崎町円明寺鳥居前	大山崎町教委	4/9~
31	物集女車塚第5次調査		向日市物集女町南条	(財)向日市埋文	12/2~3/31
32	第18次遺跡確認調査		大山崎町円明寺夏目	大山崎町教委	1/18~
33	山崎津跡第10次調査		大山崎町大山崎茶屋前	大山崎町教委	2/26~3/3
34	海印寺跡第2次調査		長岡京市奥海印寺	長岡京市教委	4/5~4/28
35	山崎国府跡第28次調査		大山崎町大山崎明島	大山崎町教委	4/8~



▽番号は一覧表・本文 ( ) 内と対応

調査地位置図

## 宮内第275次(1)

(財)向日市埋蔵文化財センター

調査地は、内裏の南面にあたり、昭和48年に京都府教育委員会によって西側隣接地の調査が行われている。今回も、前後2～3時期にわたる長岡京期の遺構が確認された。このうち、後期の遺構は、周りを小礫敷きに囲まれた南北10m・東西15.5m以上の方形区画内に、凝灰岩の礎石をもつ3間×3間の総柱建物を配置する特異な構造をもつ。出土遺物には、墨書土器(「考」)や平安京西寺所用瓦がみられ注目される。

## 左京第300次(9)

(財)向日市埋蔵文化財センター

前号で紹介した、立会第92124次調査の南に続く調査地。道路拡幅に伴う調査のため、建物跡の全容は不明であるが、東二坊坊間小路推定路面をまたぐ格好で、北側から順に、東西7間の大型建物跡1棟、東西棟2棟、総柱で2間×5間の南北棟建物跡1棟が確認された。各建物跡の柱間は、3m(10尺)等間で、掘形の構造からすべて礎石建物と判断される。礎石建物跡は、京内では初見例であり、また「東院」調査地(左京第279次)の南に対峙する位置関係からも京内の最重要地域と思われる。

物集女車塚古墳第5  
次調査

(財)向日市埋蔵文化財センター

古墳公園整備事業関連の調査。横穴式石室羨道部の解体修理に伴い石室及び墳丘構築状況の解明が図られた。石室上半分は、白色粘土でいねいに覆われ、側壁石材相互の圧着や目地止めにも粘土が使用されていた。また、玄室の前壁材に古墳時代中期の長持形石棺の側石材が転用されていることが判明した。

(辻本和美)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

(平成5年4月1日現在)

<b>理事長</b>		<b>事務局長</b>	城戸 秀夫		
福山 敏男		<b>次 長</b>	佐伯 拓郎	中谷 雅治	
(京都大学名誉教授)		<b>総務課</b>	課 長	佐伯 拓郎(兼)	
<b>副理事長</b>			課長補佐	安田 正人	
樋口 隆康			総務係長	安田 正人(兼)	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)			主 事	藤原 寛志 杉江 昌乃	
<b>理 事</b>				今村 正寿 鍋田 幸世	
中澤 圭二			調 査 員	松尾 幸枝	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)		<b>調 査</b>	課 長	橋本 清一	
川上 貢		<b>第 1 課</b>	企 画 係 長	中谷 雅治(兼)	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)			調 査 員	水谷 壽克	
上田 正昭			嘱 託	村田 照久	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)			資 料 係 長	田中 敦義	
藤井 学			主任調査員	辻本 和美	
(京都府立大学文学部教授)		<b>調 査</b>	調 査 員	松井 忠春 土橋 誠	
足利 健亮		<b>第 2 課</b>	課 長	田中 彰	
(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)			課長補佐	安藤 信策	
佐原 眞			調査第1係長	平良 泰久	
(国立歴史民俗博物館副館長)			主任調査員	伊野 近富	
都出比呂志			調 査 員	増田 孝彦	
(大阪大学文学部教授)				岡崎 研一 田代 弘	
藤田 价浩			調査第2係長	黒坪 一樹 石崎 善久	
(西芳寺貫主)			主任調査員	河野 一隆 筒井 崇史	
京極 隆夫			調 査 員	奥村清一郎	
(京都府総合府民部文化芸術室長)				引原 茂治	
武田 暹			調査第3係長	小池 寛 三好 博喜	
(京都府教育庁指導部長)			主任調査員	八木 政明 尾崎 昌之	
堤 圭三郎			調 査 員	柴 暁彦 野島 永	
(京都府教育庁指導部理事・文化財保護課長事務取扱)				小山 雅人	
<b>監 事</b>			調査第4係長	石井 清司	
吉田三枝子			主任調査員	森正 哲次 竹原 一彦	
(京都府出納局長)			調 査 員	伊賀 高弘 森島 康雄	
加藤 裕之				有井 広幸 岸岡 貴英	
(京都府監査委員事務局長)				平良 泰久(兼)	
				戸原 和人	
				竹井 治雄 石尾 政信	
				岩松 保 中川 和哉	
				鍋田 勇	

## センターの動向(5. 2～4)

1. できごと
- 2.4～9 奈良国立文化財研究所研修(木器調査課程)出席(河野調査員)
- 6 田辺町立中央公民館南部セミナー講演(伊野係長)
- 8 植物園北遺跡(京都市)関係者説明会、発掘調査終了(9.22～)
- 9 桜内遺跡(加悦町)関係者説明会  
下植野南遺跡(大山崎町)関係者説明会
- 10 京都府教育法人研修会(於:京都青年会館)講演(中谷次長)
- 11 豊岡市立郷土資料館歴史講演会(豊岡市)講演(田代調査員)
- 12 荒坂遺跡(八幡市)関係者説明会
- 13～14 埋蔵文化財研究集会(於:宮崎市)出席(野島 永・筒井崇史調査員)
- 18 平安京跡・(府警本部)関係者説明会
- 19 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於:滋賀県安土町)出席(中谷次長、安藤課長、水谷係長)  
平安京跡(西別館)発掘調査終了(12.8～)
- 20 第69回研修会(別掲)
- 22～23 作業主任者技能講習－足場組み立て－出席(安藤課長、河野調査員)
- 24 長岡京連絡協議会
- 25 遠所遺跡(弥栄町)発掘調査終了(4.13～)  
鳥取古墳群・ニゴレ遺跡(弥栄町)発掘調査終了(9.24～)  
桜内遺跡(加悦町)発掘調査終了(11.27～)  
嗎岡南古墳(加悦町)発掘調査終了(1.18～)  
荒坂遺跡(八幡市)発掘調査終了(10.13～)  
新田遺跡(八幡市)発掘調査終了(11.4～)
3. 1 足利健亮理事、百々遺跡(大山崎町)・荒坂遺跡現地視察
- 2 長岡京跡左京第286次(京都市)発掘調査終了(12.9～)
- 2～8 奈良国立文化財研究所研修(埋蔵文化財基礎課程)出席(村田調査員)
- 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於:京都市)出席(城戸局長、中谷次長、安田課長補佐)  
百々遺跡発掘調査終了(1.8～)  
平安京跡(府警本部)発掘調査終了(6.22～)
- 5 神宮谷古墳群(綾部市)発掘調査終了(10.19～)  
八木城跡(八木町)発掘調査終了(5.18～)  
長岡京跡右京第395次・下植野南遺

- |   |  |
|---|--|
| <p>跡(大山崎町)発掘調査終了(6.16～)</p> <p>7 「スライドで見えるおとくへの発掘」<br/>(大山崎町)報告(岩松調査員)</p> <p>9 燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査終了<br/>(2.18～)</p> <p>10～12 作業主任者技能講習－地山掘削<br/>・土止め支保工－(於：京都市)出席<br/>(森正、有井、柴、河野、筒井調査員)</p> <p>24 長岡京連絡協議会</p> <p>25 第36回役員会・理事会開催(於：京都私学会館)、福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、城戸秀夫常務理事、中澤圭二、川上 貢、上田正昭、藤井 学、藤田价浩、堤 圭三郎の各理事、加藤裕之監事出席</p> <p>31 退職職員辞令交付(別掲)</p> <p>4.1 新規採用職員辞令交付(別掲)<br/>人事異動(別掲)</p> <p>7 八木城跡(八木町)発掘調査開始<br/>平安京跡(京都市・府警)発掘調査開始<br/>長岡京跡右京第428次・下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始<br/>長岡京跡左京第286次(京都市)発掘調査開始</p> <p>4.9 燈籠寺遺跡(木津町)発掘調査開始</p> <p>12 梅谷瓦窯跡・中ノ島遺跡(木津町)</p> | <p>発掘調査開始</p> <p>16 溝谷城跡(弥栄町)発掘調査開始</p> <p>19 神宮谷4号墳(綾部市)発掘調査開始<br/>平安京跡(京都市・西別館)発掘調査開始</p> <p>20 ニゴレ遺跡(弥栄町)発掘調査開始</p> <p>23 近畿ブロック地区O A委員会<br/>(於：大阪市)出席(辻本係長)</p> <p>26 今林古墳(園部町)発掘調査開始</p> <p>27 長岡京連絡協議会</p> <p><b>2. 普及啓発事業</b></p> <p>2.20 第69回研修会(於：向日市民会館)<br/>－近年の都城の調査成果から－森下衛「恭仁宮東限部の調査」、松崎俊郎「長岡京跡左京二条条間大路の発掘調査－二条大路をめぐる－」、上村和直「長岡京跡左京六条三坊二町の発掘調査」</p> <p><b>3. 人事異動</b></p> <p>3.31 上田幸正主事退職</p> <p>4. 1 理事長・副理事長・常務理事・他の全理事及び監事再任<br/>藤原寛志主事採用(京都府教育庁から派遣)</p> <p style="text-align: right;">(安藤信策)</p> |
|---|--|

受贈図書一覧 (5.2.1 ~ 4.30)

苫小牧市埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査センター

秋田県埋蔵文化財センター

柏原5遺跡発掘調査(第2次)概要報告書、美沢11遺跡 ~ 道道新千歳空港線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書~

図説「青い森の縄文人とその社会-縄文時代中期・後期編」

秋田県埋蔵文化財センター年報 11 平成4年度、秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第8号、曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 一家ノ後遺跡一、一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 一鴨子台遺跡・八幡台遺跡一、一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 一萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡一、東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅡ 一新町遺跡一、東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ 一茂竹沢遺跡一、東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅣ 一虫内Ⅱ遺跡一、東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅤ 一越上遺跡一、国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 一萩ノ台Ⅱ遺跡一、曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 一野沢岱遺跡一、払田柵跡 一第92・93次調査概要一、遺跡詳細分布調査報告書

(財)福島県文化センター

母畑地区遺跡発掘調査報告32-弥明遺跡一、三春ダム関連遺跡発掘調査報告5-蛇石前遺跡(本文編)一、三春ダム関連遺跡発掘調査報告5-蛇石前遺跡(図版編)一、三春ダム関連遺跡発掘調査報告6-光谷遺跡一

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

房谷戸遺跡Ⅱ <第Ⅰ文化層編>、房谷戸遺跡Ⅱ <第Ⅱ・Ⅲ文化層編>、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報11、研究紀要10、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第128集 鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F(本文編)、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第128集 鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F(図版編)、荒砥北三木堂遺跡Ⅱ一(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第136集一、史跡十三宝塚遺跡、南蛇井増光寺遺跡Ⅰ

(財)君津郡市文化財センター

財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第64集 打越遺跡・神明山遺跡(打越遺跡本文編・神明山遺跡編)、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第64集 打越



(財)香取郡市文化財センター	遺跡・神明山遺跡(打越遺跡遺物編)、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第65集 岩井遺跡、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第66集 川島遺跡発掘調査報告書、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第75集 西郷遺跡・万崎古墳群、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第76集 竹岡十三塚遺跡、財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第78集 七人堀込遺跡 四角山遺跡-(財)香取郡市文化財センター調査報告書 第10集一、青馬大明神遺跡、神代夏方遺跡・稲荷入岩跡・稲荷入1号塚・2号塚
(財)印旛郡市文化財センター	第1回遺跡発表会 発表要旨
神奈川県立埋蔵文化財センター	宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第56集 丘の公園第5遺跡発掘調査報告書
長野市埋蔵文化財センター	二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡 一第1分冊一、二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡 一第2分冊一、小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ、浅川扇状地遺跡群 木村東沖遺跡
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター年報 平成2年度、富山県埋蔵文化財センター年報 平成3年度、古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告一 中老田C遺跡・塚越A遺跡一、ジャパンエキスポ関連遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 石太郎Ⅰ遺跡・石太郎Ⅱ遺跡、ジャパンエキスポ関連遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 石太郎Ⅰ遺跡・石太郎Ⅱ遺跡、富山県富山市 南中田D遺跡発掘調査報告書、北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編6 境A遺跡一土器編(本文)一、北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編6 境A遺跡一土器編(写真図版)一
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	東権現A窯跡、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第2集 仏供田窯跡、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第3集 窯元A窯跡、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第5集 経塚山西窯跡
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第27回)資料
(財)八尾市文化財調査研究会	平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)Ⅰ 成法寺遺跡(第5次調査)Ⅱ 中田遺跡(第3・4次調査)Ⅲ 竹湊遺跡(第2次調査)
桜井市立埋蔵文化財センター	『二粒の粳』展

津山弥生の里文化財センター	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第48集 三毛ヶ池遺跡、大畑遺跡 ー津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告7ー
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	県道「伊予ー川西線」関連埋蔵文化財発掘調査報告書(平松遺跡・旗屋遺跡Ⅰ)、愛媛県立今治南高等学校日高農場 埋蔵文化財発掘調査報告書 黒田遺跡、一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 松環古照遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	弥生時代の海上交易、かいなご3号墳・平井谷1号墳、山越・久万ノ台の遺跡 山越Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次久万ノ台・野津子山
小樽市教育委員会	手宮公園下遺跡 ー小樽市公営住宅手宮公園団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第143集 年報11ー平成元年度ー、仙台市文化財調査報告書第155集 年報12ー平成2年度ー、仙台市文化財調査報告書第158集 町田遺跡発掘調査報告書、仙台市文化財調査報告書第167集 年報13ー平成3年度ー
山形県教育庁文化課	分布調査報告書(20)
土浦市教育委員会	土浦市嵩久保一里塚発掘調査報告書、茨城県指定史跡土浦城址発掘調査報告書、国指定史跡上高津貝塚の発掘ー史跡整備に伴う発掘調査の概要ー、土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書、木田余台ー茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報ー、木田余台Ⅰ
栃木県教育委員会	埋蔵文化財センター年報第2号(平成4年度)、栃木県埋蔵文化財調査報告第119集 永為遺跡、栃木県埋蔵文化財調査報告第120集 一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過(平成2年度)、栃木県埋蔵文化財調査報告第122集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報(平成2年度)、栃木県埋蔵文化財調査報告第123集 下野国分寺跡Ⅷ 平成2年度発掘調査概報、栃木県埋蔵文化財調査報告第125集 久保遺跡
前橋市教育委員会	文化財調査報告書 第22集
坂戸市教育委員会	文化財調査報告書 入西のジャクシン
東金市教育委員会	平成4年度東金市遺跡発掘調査報告書 ー油井古塚原遺跡(丑子台地点)・込前馬土手ー
富津市教育委員会	神明山遺跡発掘調査報告書、東冠遺跡発掘調査報告書、富津市内遺跡発掘調査報告書 飯野陣屋二の丸跡 白姫塚南方古墳
木更津市教育委員会	木更津市内遺跡発掘調査報告書 ー花山遺跡ー、大畑台遺跡群確認調査報告書Ⅱ、千束台遺跡群確認調査報告書Ⅲ

市原市教育委員会	平成4年度 市原市内遺跡発掘調査報告 姉崎東原遺跡D地点 江子田送り神塚 大鹿鍛冶屋前台遺跡、市原市内仏像彫刻所在 調査報告書 -南部編一、市制施行30周年記念 いちはらの文 化財
船橋市教育委員会	平成4年度 船橋市市内遺跡発掘調査報告書
東京都教育庁	東京の遺跡散歩
日野市教育委員会	日野市埋蔵文化財発掘調査報告書10 南広間地遺跡 2、日野 市埋蔵文化財発掘調査報告書11 南広間地遺跡 3
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告 35、神奈川県埋蔵文化財調査報 告 35
敷島町教育委員会	敷島町埋蔵文化財報告第I集 金の尾遺跡第II次発掘調査報告 書、天狗沢瓦窯跡と古代甲斐国
上野原町教育委員会	上野原町埋蔵文化財調査報告書第3集 穴沢遺跡・カイル遺 跡、上野原町埋蔵文化財調査報告書第4集 大野窪遺跡、桜ヶ 丘遺跡 県道佐野川上野原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告書、上野原小学校遺跡 町立上野原小学校校舎改 築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
中道町教育委員会	立石遺跡
岡谷市教育委員会	渡辺三大臣と旧渡辺家住宅
小松市教育委員会	銭畑遺跡I 発掘調査報告書
武生市教育委員会	王子保窯跡群IV、野々宮廃寺III
福井市教育委員会	福井城跡I
新居町教育委員会	寺川遺跡・天白遺跡・西脇遺跡一郷北土地区画整理事業に伴 う埋蔵文化財発掘調査報告書一
稲沢市教育委員会	愛知県稲沢市 東畑廃寺跡発掘調査報告書(V)
松阪市教育委員会	湧早崎遺跡発掘調査報告書
近江町教育委員会	岩脇遺跡
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要一平成3年度一、大西遺跡、 三軒屋遺跡発掘調査報告書一91-1区の調査一、上町遺跡発掘 調査概要一91-1区の調査一、船岡山遺跡発掘調査報告書一91- 3区の調査一、諸目遺跡一91-1区の調査一、若宮遺跡一91-11 区の調査一、湊遺跡一91-6区の調査一、湊遺跡一91-5区・91-3 区の調査一、諸目遺跡一91-5区の調査一、三軒屋・諸目遺跡 発掘調査概要
東大阪市教育委員会	西の口・鬼塚・若江遺跡の調査 一平成4年度一
大阪狭山市教育委員会	池尻新池南窯発掘調査報告書 一陶邑窯跡群の調査一、大阪狭

豊中市教育委員会  
伊丹市教育委員会

西宮市教育委員会  
和田山町教育委員会

加古川市教育委員会

西紀・丹南町教育委員会

姫路市教育委員会

兵庫県教育委員会

山市内遺跡群 発掘調査概要報告書 3

豊中市埋蔵文化財調査概要 1992(平成4)年度

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ 御願塚古墳外堤部の調査、有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ 第2分冊

灘の酒づくり -文化財資料・第37集-

ムクノ木遺跡 和田山町文化財調査報告書 第5集

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ

丹南町遺跡分布地図

播磨国分尼寺跡 -遺跡発掘事前総合調査概要報告-

上構遺跡 -揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告-、籠

谷古墳・宅原遺跡 中国自動車道改良工事に伴う埋蔵文化財発

掘調査報告書、龍野城 -神戸地方検察庁龍野支部庁舎建替え

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-、鷹取町遺跡 -須磨郵便

局移転建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-、上板井遺跡

発掘調査報告書、井根口遺跡発掘調査報告書 -一級河川四斗

谷川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-、高川

古墳群 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(X

V)、長磯遺跡 満願寺川災害復旧助成工事に伴う埋蔵文化財

発掘調査報告書、本庄町遺跡 -郵政省宿舎建替に伴う埋蔵

文化財発掘調査報告書-、住吉宮町遺跡発掘調査報告書、浪

滝遺跡、半田山 -山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ-

杉ヶ沢遺跡、赤穂市 周世入相遺跡、雨流遺跡 -淡路縦貫道

関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ- 本文編、雨流遺跡 -淡路縦

貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ- 図版編、七日市遺跡(Ⅰ)

-第2分冊-(弥生・古墳時代遺跡の調査)、下大谷古墳群 印

路古墳群C 印路台状墓、鴨庄古窯跡群(2) -上牧2・7・8

号窯跡-、落地遺跡、戸井町坪1号窯、明石城武家屋敷跡 -

山陽電鉄連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書-、山垣遺

跡 -「里長」関連遺構の調査- 発掘調査報告書、七日市遺

跡(Ⅰ)-第3分冊-(飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査)、七

日市遺跡(旧石器時代遺跡の調査)、七日市遺跡(Ⅱ)-国道175

号線交通事故防止対策工事に伴う発掘調査報告書-、有年

原・田中遺跡 発掘調査報告書、国領遺跡発掘調査報告書(蓮

町・井森杉・石風呂地区の調査)、大国山遺跡、坊ヶ塚遺跡

(住吉宮町遺跡群Ⅱ)、伊丹市 緑ヶ丘遺跡、北園遺跡発掘調査

報告書、谷町筋遺跡 -淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書

	V一、深江北町遺跡(Ⅱ) 県公営住宅深江札幌団地建替工事に伴う埋蔵文化財調査報告書、洲本城武家屋敷跡 一洲本山手公舎建設事業に伴う発掘調査報告書一、長尾・沖田遺跡(Ⅰ) 一県道下庄・佐用線道路改良工事に伴う発掘調査報告書一、上ノ島遺跡 一県公営住宅尼崎立花第1団地改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書一、野村構居跡 一級河川加古川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一、大垣内遺跡 一加古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、東武庫遺跡 県公営住宅尼崎武庫之荘団地改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、下相野窯址 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ、川除・藤ノ木遺跡 一武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一第1分冊、川除・藤ノ木遺跡 一武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一第2分冊、川除・藤ノ木遺跡 一武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一第3分冊
川西市教育委員会	シンポジウム 邪馬台国時代のクニ 一川西市加茂遺跡を中心として一
御所市教育委員会	鴨都波11次発掘調査報告 御所市文化財調査報告書 第11集、鴨都波12次概要 御所市文化財調査報告書 第12集、平成3年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査、掖上鎌子塚古墳第2次発掘調査報告 一周堤隣接地の発掘調査一、中西遺跡 一第3次発掘調査報告一 平成2年度国庫補助金緊急調査の成果 讃岐国弘福寺領の調査一弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書一
高松市教育委員会	
今治市教育委員会	今治市埋蔵文化財調査報告書第14集 今治市内遺跡詳細分布調査Ⅱ、今治市埋蔵文化財調査報告書第15集 今治市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ、今治市埋蔵文化財調査報告書第16集 今治市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ
新宮町教育委員会	新宮町文化財調査報告16一新宮町古文書目録 第7集一
那珂川町教育委員会	山田西遺跡、カクチガ浦遺跡群Ⅱ、観音山古墳群Ⅳ、今光鷹取遺跡
北九州市教育委員会	中畑南遺跡・中畑遺跡(第2次調査)一新門司インターチェンジ及び県道新門司港大里線、市道畑99号線、市道畑100号線建設に伴う発掘調査一
宗像市教育委員会	弥生時代の墓制を考える一甕棺墓・木棺墓・墳丘墓の成立と展開一

安岐町教育委員会	光広遺跡－安岐町文化財調査報告書 第2集－
佐伯市教育委員会	梅牟礼城址と関連遺跡発掘調査報告概要IV
都城市役所	丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡 丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
土浦市立博物館	土浦市立博物館紀要 第4号
栃木県立博物館	図録 行楽・観光・レジャー
埼玉県立博物館	埼玉県立博物館 紀要－18、埼玉県立博物館館有資料目録IX、比企岩殿観音とその門前町 歴史民俗資料調査報告書、特別展「つば・かめ・すりばち」展示図録
浦和市立郷土博物館	浦和市立郷土博物館 研究調査報告書第20集
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第45集、国立歴史民俗博物館研究報告 第46集、国立歴史民俗博物館研究報告 第41集、国立歴史民俗博物館研究報告 第50集
芝山町立郷土博物館	平成4年度 芝山町内遺跡発掘調査報告書 小池麻生遺跡 坂志岡・尼ヶ谷遺跡
出光美術館	出光美術館館報第80号
調布市郷土博物館	埋蔵文化財年報－平成元年度－、埋蔵文化財年報－平成2年度－、調布市埋蔵文化財調査報告23 調布市上布田遺跡－第2地点の調査－、調布市埋蔵文化財調査報告27 調布市上ヶ給遺跡－第10地点－、企画展 縄文土器 それぞれの顔
総合博物館府中市郷土の森	府中市郷土の森 年報 第6号(平成3年度)
小田原市郷土文化館	小田原市郷土文化館研究報告 No. 29 (人文科学No. 15)
富山市考古資料館	富山市考古資料館報 No. 23
永見市立博物館	永見の婚礼装束展－打掛けを中心として－
石川県立歴史博物館	石川県立歴史博物館紀要 第6号、春季特別展 科学技術の19世紀
三方町立郷土資料館	向笠集落の歴史展－縄文時代から現代へ－、三方町文化財調査報告書 第11集 市港遺跡 北寺遺跡
土岐市美濃陶磁歴史館	桃山の華－大坂出土の桃山陶磁－
浜松市博物館	浜松市博物館館報V、正言寺平遺跡発掘調査報告書、助ヶ平 I・II 遺跡・早瀬遺跡(本文・写真図版)、助ヶ平 I・II 遺跡・早瀬遺跡(別添付図)
名古屋市博物館	名古屋市博物館館蔵品目録 第1分冊総集・考古編、縄文から弥生へ
一宮市博物館	市内遺跡発掘調査概要報告書II

齋宮歴史博物館

彦根城博物館

水口町立歴史民俗資料館

大阪府立弥生文化博物館

岸和田市立郷土資料館

堺市博物館

播磨町郷土資料館

和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所

九州歴史資料館

東北学院大学学術研究会

山形大学人文学部歴史学研究室

茨城大学 人文学部

筑波大学歴史・人類学系

日本大学史学会

東海大学史学会

愛知学院大学文学会

大阪大学文学部

大谷女子大学資料館

大手前女子大学

神戸大学考古学研究会

奈良大学図書館

愛媛大学埋蔵文化財調査室

別府大学附属博物館

北網圏北見文化センター

陸平調査会

日本窯業史研究所

史跡足利学校管理事務所

平成3年度 齋宮歴史博物館年報

彦根城博物館研究紀要 第3号

近江国水口大徳寺文書目録 一滋賀県甲賀郡水口町所在一

弥生文化博物館研究報告 第1集、一平成5年春季特別展一  
ちのく弥生文化

岸和田の文化財

博多と堺、堺市博物館報 第12号

播磨町郷土資料館 館報 1992

紀伊風土記の丘年報 第19号

九州歴史資料館年報 平成3年度、九州歴史資料館研究論集17

東北学院大学論集 歴史学・地理学 第25号

山形大学史学論集 第13号

博古研究 第5号

筑波大学 先史学・考古学研究 第4号

史叢 第49号

東海史學 第27号

愛知学院大学文学部紀要 第22号

待兼山論叢 第26号

龍泉寺 一坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書一

大手前女子大学論集 第26号

神戸市東灘区 生駒古墳調査報告

奈良大学紀要 第21号

樽味遺跡Ⅱ 一樽味遺跡2次調査報告一

駒方津室迫遺跡の構造論的研究一剥片剝離・石器製作技術の  
考察と遺跡の復元一

平成3年度 北網圏北見文化センター 年報、南町遺跡Ⅳ 一常  
呂川改修工事常呂川第2頭首工改築工事に伴う緊急発掘調査  
概要報告書一

陸平調査会報告2 1988年陸平貝塚周辺遺跡発掘調査報告およ  
び概要、陸平研究報告1 陣屋敷遺跡

日本窯業史研究所報告第42冊 杉久保遺跡Ⅰ(勝坂期)、日本窯  
業史研究所報告第43冊 上ノ原・向原南遺跡

史跡足利学校跡保存整備報告書一経過・発掘調査編一、史跡

山武考古学研究所	足利学校跡保存整備報告書ー建築編一、史跡足利学校跡保存整備報告書ー庭園・外構編一 紅葉城跡発掘調査報告書、岩折遺跡発掘調査報告書(日立市文化財報告 第29集)、宝泉寺跡発掘調査報告書、山田・宝馬古墳群ー145号墳・155号墳・192号墳・193号墳の調査一、下新田遺跡発掘調査報告書、尾柄町遺跡、尾柄町Ⅱ遺跡、群馬県富岡市・甘楽町 日向山遺跡発掘調査報告、関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
芝山町史編さん事務局	芝山町史資料集1. 原始・古代(1)、芝山町史資料集1. 原始・古代(2)
調布市原山遺跡調査会	はらやま 上巻ー都営調布柴崎一丁目第2住宅建て替えに伴なう発掘調査一、はらやま 下巻ー都営調布柴崎一丁目第2住宅建て替えに伴なう発掘調査一
(株)名著出版	歴史手帖 第21巻3号、歴史手帖 第21巻4号
(株)学習研究社	ジュニア日本史大図鑑
メル プランニング	グラフィティ日本謎辞典③古墳
清瀬市下宿内山遺跡調査団	下宿内山遺跡 本文、下宿内山遺跡 遺物図版Ⅰ、下宿内山遺跡 遺物図版Ⅱ(原色)、下宿内山遺跡 遺物表
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集(第3集)
(株)新人物往来社	新視点 日本の歴史 第1巻 原始編
(株)ジャパン通信社	月刊 文化財 発掘出土情報(通巻第124号)
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第44号
相模原市No.63遺跡調査団	田名坂上遺跡
(財)山梨文化財研究所	湯之奥金山遺跡学術調査報告書 湯之奥金山遺跡の研究
(財)古代学協会	古代文化 第45巻第2号(第409号)、古代文化 第45巻第3号(通巻第410号)、古代文化 第45巻第4号(通巻第411号)
古代を考える會	古代を考える54ー埴輪製造所遺跡の検討一
大阪城天守閣	天守閣復興60周年記念特別展 豊臣秀吉展、生誕400年記念特別展 豊臣秀頼展
高山歴史学研究所	南河内先史学 9、歴史学 10
淡神文化財協会	玉津田中遺跡発掘調査報告書Ⅰー遺構編一、淡河萩原遺跡 発掘調査報告書(Ⅰ)、淡河萩原遺跡 発掘調査報告書(Ⅱ)、淡河中山遺跡 発掘調査報告書Ⅰ
関西近世考古学研究会	関西近世考古学研究Ⅲ、関西近世遺跡の在り地土器の生産と流通
姫路市立城郭研究室	城郭研究室年報 第2号



朝来郡広域行政事務組合

朝鮮学会

由良大和古代文化研究協会

帝塚山考古学研究所

宮内庁正倉院事務所

博物館等建設推進 九州会議

(財)向日市埋蔵文化財センター

京北町教育委員会

加悦町教育委員会

弥栄町教育委員会

宇治市教育委員会

山城町教育委員会

向日市文化資料館

宇治市歴史資料館

京都府立山城郷土資料館

亀岡市文化資料館

佛教大学図書館

口丹波史談会

舞鶴市史編さん室

木津町役場

有井広幸

伊野近富

賀川光夫

鍋田 勇

和田山町の古墳 = 竹田地区主要古墳の測量調査 =

朝鮮学報 第146輯

盾塚 鞍塚 珠金塚古墳

考古学における計量分析 - 計量考古学への道(Ⅱ) -、第6回  
考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状

正倉院年報 第15号

文明のクロスロード Museum Kyusyu 通巻42号

向日市埋蔵文化財調査報告書 第36集、(財)向日市埋蔵文化財  
センター 年報 都城4

京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 のほりお古墳  
発掘調査概報

史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書 - 加悦町文化財調査報  
告第15集 -、作山1号墳からのメッセージ - 加悦町文化財調  
査報告第18集 -

歴史シンポジウム 古代製鉄と日本海文化

旦棕遺跡 第2次発掘調査概報

山城町内遺跡発掘調査概要Ⅳ ~ 椿井大塚山古墳 第3次調  
査・神童寺跡 第1次調査 ~

向日市文化資料館報 第8号 (平成3年度)、京都府向日市・  
向日区有文書調査報告書(向日市古文書調査報告書 第二集)

宇治茶の文化史

山城郷土資料館報 第10号、山城郷土資料館報 第10号

亀岡市文化資料館報 創刊号

鷹陵史学 第18号

丹波史談 平成4 - 特・史

舞鶴市史 通史編(上)

一條家領鹿背山焼 附・近世銅版染付史

古墳時代の祭祀 第Ⅰ分冊 - 東日本編Ⅰ -、古墳時代の祭祀  
第Ⅱ分冊 - 東日本編Ⅱ -、古墳時代の祭祀 第Ⅲ分冊 - 西日本  
編 -

糸里制研究 第8号

史学論叢 第23号

古代の小郡 PartⅡ - 近年の発掘調査の成果と出土品 -

## 編集後記

梅雨に入り、うっとおしい日々が続きますが、情報48号が完成しましたのでお届けします。

本号では、今年度の発掘調査予定と、昨年度の発掘調査の成果をまとめるのを中心に掲載しました。また、職員の日頃の研究成果も掲載することができ、本号も充実した内容になりました。今後も、発掘調査成果だけでなく、職員の研究成果もできるだけ掲載していきたいと考えています。よろしく、御味読下さい。

なお、本号もMacintosh用のソフトウェアのQuarkXpress 3.1Jを用いて編集しました。

(編集担当=土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第48号

平成5年6月23日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel(075)441-3155 (代)